

令和6年9月26日

令和5年度 鹿児島女子短期大学 アセスメント報告書

教学マネジメント会議

目次

アセスメント・ポリシー（学生の学修成果の評価方針）	1
1. 児童教育学科	2
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	2
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	3
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	6
2. 生活科学科生活福祉専攻	9
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	9
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	10
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	11
3. 生活科学科食物栄養学専攻	14
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	14
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	18
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	19
4. 教養学科	23
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	23
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	32
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	34
5. 短期大学全体	38
(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証	38
(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証	39
(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証	41
6. あとがき	46

アセスメント・ポリシー（学生の学習成果の評価方針）

鹿児島女子短期大学では、学生の学習成果の評価方針として、その目的、達成すべき質的水準等、学習成果を査定する方法を次のとおり定めています。

	入学前・入学時（入学時審査）アドミッション・ポリシーを満たす人材かどうかの判定	在学中（単位認定・進級判定）カリキュラム・ポリシーに則って学修が進められているかどうかの評価	卒業時・卒業後（卒業時判定）ディプロマ・ポリシーを満たす人材になったかどうかの判定
短期大学 全体レベル (機関レベル)	○入学試験 ・小論文 ・教科の試験 ・調査書 ・面接、口頭試問 ・アピールシート ・実技試験 ・取得資格 ○新入学生アンケート	○カリキュラムマップ ○カリキュラムツリー ○修得単位数 ○学生アンケート ○地域活動参加状況 ・地域連携センター活動	○就職及び進学状況・率 ○卒業生アンケート・動向調査 ○卒業率 ○単位取得状況 ○免許・資格取得状況・率
学科レベル (教育課程 レベル)	○入学前教育 ・課題レポートの提出 ・実技指導	○定期試験 ○修得単位数 ○GPA ○教職履修カルテ（児童教育学科・生活科学科食物栄養学専攻） ○自己分析シート（教養学科）	○就職及び進学状況・率 ○卒業生アンケート・動向調査 ○卒業率 ○単位取得状況 ○免許・資格取得状況・率 ○GPA ○修得単位数 ○学習に関する調査
科目レベル (個々の授業レベル)		○授業評価アンケート ○成績評価 ○実習所見・評価	○単位取得状況 ○成績評価 ○授業評価アンケート

利用した IR 情報一覧

No	情報
1	進学に関するアンケート 2023 結果
2	入学前教育の検証
3	AP に則った入試の検証
4	卒業生アンケート
5	学生満足度調査
6	授業改善報告書
7	DP に関する報告書
8	学生による授業評価アンケート結果（2023FD 報告書）
9	ティーチング・ポートフォリオ
10	「短期大学卒業生に関する調査研究-2022 年調査全体集計結果報告」
11	「短期大学卒業生調査」データ

1. 児童教育学科

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

《児童教育学科のアドミッション・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的としています。

本学科は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

- ① 高等学校等の教育における基礎的な知識・技能を有し、子どもの成長・発達に関わる専門性を身につけようとする人
- ② 本学の教養教育・専門教育に十分対応できる思考力・判断力・表現力を有し、教育・保育の課題解決に取り組む基礎的な資質をもつ人
- ③ 学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人

① 高校教育の基礎的知識・技能

高等学校での教育における知識・技能に関しては、出願の際の調査書や取得資格、本学の課す学力試験・実技試験の結果、面接試験や論文試験等を通して総合的に判断している。例えば、調査所等で高等学校での成績や保育技術検定といった外部試験の結果を吟味したり、学力試験や論文において書く力や基礎知識の有無を測ったり、実技試験で絵本の読み聞かせ・歌唱・ピアノのいずれかを通して評価を行ったりしている。具体的には、総合型選抜の専門系試験において、幼保コースでは17名の受験者があり、16名が基準点を超える実技を行なった。

一方で、入学後の実習実技や実習日誌作成に必要なピアノの技能やライティングの基礎知識などにおいて個人差がみられることから、入学予定者には本学独自の入学前課題として A) 漢字の書き取り課題、B) ピアノ初心者・未経験者向け講習会を実施している。

入学前の課題については、離島を含む遠方の入学生もいることから、入学後の提出としている。令和5年度入学生については、入学者171名中167名が課題を提出し提出率は97.7%で、昨年度よりも0.1ポイント提出率が上昇した。また、令和4年度は課題の記載内容に不備があった学生が12名いたが、令和5年度は記載に不備があり再提出を求めた学生はおらず、課題を提出した学生はしっかりと課題に取り組んでいた。課題内容は保育に関する漢字の書き取りであり、採点を学生に自己採点させているため正解率の詳細は述べられないため、これにより高等学校までの学習で基本的知識や技能等を有しているかを測れているとは言い難いところもあり、課題内容の再検討を行って、令和6年度入学生より課題内容の変更に繋がった。

課題に対する学生へのフィードバック方法については、解答プリントとともに課題を返却して、自己採点をさせた後、小幼保コースは1年後期、幼保コースは2年前期に、「幼児と言葉」の授業で、自己採点が完了しているか確認するとともに、課題の内容が定着できているかについて、授業内で確認テストなどの副教材として利用した。

また、入学前に入学後に学ぶピアノ実技について初心者・未経験者向けにピアノ講習会を開催している。令和5年度入学生は入学者171名中37名が受講した。受講者には指使い等の実技指導を行うため、入学までに練習をする等で、入学時の初回レッスンでの合格率も高く、その後も授業時間外に質問に来たり、自主的に練習に取り組んだりする学生が多く、ピアノ実技の上達が早い傾向が続いている。令和4年度のアセスメントで、ピアノ経験者に向けても入学前に資料配布等を行うことにより、ピアノ実技の練習を自主的に行なってもらった等の案内を検討できるとしたが、令和5年度は実施には至らなかった。

② 思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢

思考力・判断力・表現力等に関しては、主に出願時の調査書（アピールシート）や面接、小論文の内容を通して評価を行っている。例えば、R6年度の学校推薦型選抜（指定校）の小論文では、①「思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢」の評価項目として「論理的一貫性はあるか」「意見は明確化」を設けた。この試験における令和4年度及び令和5年度の受験者数、平均点、基準点、基準点を上回

った学生数は表のようになった。

表. 学校推薦型選抜（指定校）の小論文の受験者数、平均点、基準点を上回った受験者数

コース	年度	受験者数	平均点	基準点	基準点を上回った学生数		
					総点	評価基準① 「論理的一貫性はあるか」	評価基準② 「意見は明確か」
小幼保	R4	24	74.6	60	21 (87%)	23 (96%)	22 (92%)
	R5	20	73.6	60	19 (95%)	18 (90%)	19 (95%)
幼保	R4	97	71.4	60	82 (85%)	89 (92%)	90 (93%)
	R5	68	72.5	60	61 (90%)	59 (87%)	63 (93%)

表から分かるように、令和4年度と比較すると令和5年度試験で総点において基準点を上回った受験者数は増加している。一方で、思考力・判断力・表現力等の評価の観点において基準点を上回った受験者の割合は令和4年度と比べて著しい変化は見られなかった。約10%の基準点を下回る学生については、入試判定会議においてアセスメント・ポリシーの基準に照らしながら合格の可否を議論し入学後の指導についても検討している。

また、総合型選抜（専門系・児童教育学科）保育、音楽（歌唱）、音楽（ピアノ）の実技試験では、実技の「準備」、「態度」、「表現」等を評価している。受験者数、平均点、基準点を上回った受験者数は表の通りである。

表. 総合型選抜（専門系・児童教育学科）保育、音楽（歌唱）、音楽（ピアノ）の実技の受験者数、平均点、基準点を上回った受験者数

コース	年度	受験者数	平均点	基準点	基準点を上回った学生数			
					総点	評価基準① 「準備」	評価基準② 「態度」	評価基準③ 「表現」/ 「目的意識」
小幼保	R4	14	39.4	26	14 (100%)	14 (100%)	14 (100%)	14 (100%)
	R5	1	26	26	1 (100%)	1 (100%)	1 (100%)	1 (100%)
幼保	R4	31	38.9	26	17 (100%)	31 (100%)	30 (97%)	31 (100%)
	R5	17	35.7	26	17 (100%)	17 (100%)	17 (100%)	17 (100%)

令和4年度に比べ、令和5年度では受験者数自体が減少しているが、基準点を上回った受験者は両コースともに100%であった。このことから、専門技能を用いる試験においてアセスメント・ポリシーに沿った学生を確保することができたことが分かる。

（2）カリキュラム・ポリシーに基づく検証

《児童教育学科のカリキュラム・ポリシー》

児童教育学科は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、学科の専門教育を以下のように編成します。

- ① 教職課程コアカリキュラム及び保育士養成課程を踏まえ、教師・保育者として必要な資質・能力を育成できるように体系的かつ系統的に科目を配置する。
- ② 学校現場・保育現場等のニーズに応えるため、知識・技能等を高める選択科目を設け、学生が主体的に専門性を高める環境を整える。
- ③ 地域のニーズを踏まえ、地域に貢献する教師・保育者としての意識や知識・技能等を高めるための科目を配置する。

児童教育学科の専門科目は、児童教育学科カリキュラム・ポリシーを踏まえ、児童教育学科ディプロマ・ポリシーと関連し、以下の3つの科目群に分類される。

- ① 教育・保育に必要な専門性
- ② 課題解決能力
- ③ 豊かな人間性

これらそれぞれの科目群について、開講学期ごとの配当状況をまとめると以下の表のようになっている。

科目群	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	総合
①必要な専門性	14	13	16	18	61
②課題解決能力	0	4	10	3	17
③豊かな人間性	6	4	2	3	15
総科目数	20	21	28	24	93

以上のように全体の総科目数については、配当状況はバランスが取れているといえる。一方で、②課題解決に該当する科目は、実習や実習指導が目立ち、教職実践演習と環境教育演習しか該当する科目がない。各科目で何を重視するかに関して、教員個人の判断だけでなく、科目性と系統性を学科全体で検討する必要があると考えられる。

○試験とその結果としての成績評価・G P A

令和5年度の児童教育学科卒業生の平均G P A（最高：最低）を以下に示す。なお、令和3年度、令和4年度の卒業延期者2名（小・幼・保コース）が含まれている。

平均G P A	1 年次	2 年次
児童教育学科全体	2.56 (3.64:0.92) 2.62 (3.38 : 0.73)	2.82 (3.75:1.09) 2.97 (3.75 : 1.36)
小・幼・保コース	2.74 (3.63 : 1.82) 2.87 (3.34 : 1.65)	3.06 (3.73 : 1.88) 3.25 (3.73 : 2.22)
幼・保コース	2.50 (3.64 : 0.92) 2.55 (3.38 : 0.73)	2.75 (3.75 : 1.09) 2.89 (3.75 : 1.36)

（上が令和5年度、下が令和4年度入学生のGPA）

令和4年度入学生のG P Aの平均値は児童教育学科全体、小幼保コース、幼保コースのそれぞれにおいて、「2.5」を超えており、卒業時には「3.0」に近い値となっている。そのため、学科として適切に学修が進められたと考える。一方で、最低点が1を切る学生、また、令和3年度入学生に比べ令和4年度入学生の平均値が低いことから、教育内容・方法を常に改善していく必要性が示唆される。

○修得単位数

令和5年度及び4年度の児童教育学科卒業生の平均修得単位数（最高：最低）を以下に示す。なお、令和3年度の卒業延期者1名（幼・保コース）が含まれている。

平均修得単位数		1 年次	2 年次	総修得単位
児童教育学科全体	R5 卒 (R4 入) R4 卒 (R3 入)	66.6 (80 : 27) 69.5 (83 : 8)	49.4 (85:3) 47.0 (84 : <u>23</u>)	117.0 (165:80) 117.0 (167 : <u>86</u>)
小・幼・保コース	R5 卒 (R4 入) R4 卒 (R3 入)	78.4 (80 : 28) 80.9 (83 : 61)	71.9 (85:3) 69.8 (84 : 33)	152.0 (165:94) 150.7 (167 : 94)
幼・保コース	R5 卒 (R4 入) R4 卒 (R3 入)	62.86(64:27) 66.0 (71 : 8)	42.0(52:5) 39.5 (50 : <u>23</u>)	106.0(116:80) 105.9 (121 : <u>86</u>)

修得単位数「8」、「23」、「86」の最低値となった学生は、令和3年度の卒業延期者の値であり、卒業延期者を除く最低単位数は1年次「58」、2年次「30」、総修得単位「94」である。以上ことから、児童教育学科全体、小幼保コース、小幼保コースのそれぞれにおいて、最低修得単位数「62」を大幅に超えている。これは、免許・資格の取得に必要な最低取得単位数（小学校教諭二種免許状：幼稚園教諭二種免許状：保育士証）「85：66：92」が関わっているといえるが、学科として適切に学修が進められたと考える。しかしながら、幼・保コースでは、1年次と2年次で26.5単位もの差が生じている。総修得単位を2年間で均等割りした場合の約53単位と比べても、2年後期は13.5単位も少ないため、学期ごとの配当に関しては検討が必要と考える。

○教職履修カルテ

1年後期のキャリアガイダンス、2年前期の特設の時間、2 年後期の保育・教職実践演習の時間を利用し、学期ごとにこれまでの学修を振り返り、保育・教育に携わる実践者としての課題を明確にするために「履修カルテ」への記載を実施している。ホーム単位で「履修カルテ」を作成し、Microsoft Teams を利用し、提出している。「履修カルテ」では免許学習内容の振り返り、教育者・保育者としての実践的な能力に関する自己評価と課題点の記載をおこない、ホーム担任教員がコメントをつけて返却している。専門科目数が非常に多く、それぞれの科目ごとの丁寧な振り返り、関連科目ごとの統合した振り返りなどを取り上げた実施ができてないが、各学期の自己の課題を意識化する手立てとなっていると考えられる。

○実習所見・評価

令和5年度児童教育学科卒業生に対して、1 年次に幼稚園実習Ⅰ、保育所実習Ⅰがあり、2 年次に小学校実習（小・幼・保コース）、幼稚園実習Ⅱ（幼・保コース）、保育所実習Ⅱ、施設実習Ⅰを実施した。

それぞれの実習における評価については、A～Dの4段階（A：達成した、B：おおむね達成した、C：努力を要するが、おおむね達成した、D：全く達成できなかった）となっている。それぞれの実習における総合評価の結果を昨年度と比較しながら以下に示す。掲載の順番は実習の開講時期の順番とした。

実習名	学期	学生数	A	B	C	D
幼稚園教育実習Ⅰ	R3後期	183	30.1% (55人)	61.2% (112人)	7.7% (14人)	1.1% (2人)
	R4後期	196	21.4% (42人)	64.7% (127人)	13.8% (27人)	0% (0人)
保育所実習Ⅰ	R3後期	109	52.3% (57人)	44.0% (48人)	3.7% (4人)	0.0% (0人)
	R4後期	193	53.4% (103人)	41.0% (79人)	5.2% (10人)	0.5% (1人)
小学校教育実習Ⅰ	R4前期	46	76.1% (35人)	23.9% (11人)	0.0% (0人)	0.0% (0人)
	R5前期	43	79% (34人)	21% (9人)	0% (0人)	0% (0人)
幼稚園教育実習Ⅱ	R4前期	133	36.1% (48人)	54.1% (72人)	9.0% (12人)	0.8% (1人)
	R5前期	128	58.6% (75人)	34.3% (44人)	7% (9人)	0% (0人)
保育所実習Ⅱ	R4前期	181	65.2% (118人)	31.5% (57人)	3.3% (6人)	0.0% (0人)

	R5 前期	158	67.1% (106人)	28.5% (45人)	4.4% (7人)	0.0% (0人)
施設実習 I	R4 前期	175	56.0% (98人)	41.7% (73人)	2.3% (4人)	0.0% (0人)
	R5 前期	184	50% (92人)	48.4% (89人)	1.6% (3人)	0.0% (0人)
全実習平均%			52.6%	42.7%	4.3%	0.3%
			56.0%	39.6%	5.3%	0.4

以上のように、年度による差は小さく、A評価、B評価となった学生の割合が全実習において8割を超えており、実習全体の平均%は90%を超えている。令和5年度卒業生に関して、C評価、D評価となった学生の割合が、一定程度おり、これらの学生に対する指導のあり方は引き続き課題として上げらえる。一方、A評価となった学生の割合は、その後の実習へと進むにつれて増加していることから、全体として適切に学習が進められていると言えよう。

一方で、全体として、職員・子ども（利用者）との関わりにおける距離感の調整、積極性などといったコミュニケーション力に関する指摘や、日誌の記録等での表現内容の充実、誤字脱字の改善といった記述力に関する指摘が見られた。これらコミュニケーション力、記述力等に関しては、各実習指導だけでは対応が難しい課題でもあるため、カリキュラムの検討や各授業で連携した対応が必要といえる。

○授業評価アンケート

授業評価アンケートの回答結果を元に、令和4年度児童教育学科卒業生がディプロマ・ポリシーを満たす人材になりえたかに関する回答を求めた。その結果を通覧したところ、どの教員も担当する科目における最も関連の深いDPに関して、概ね達成されたとの報告がなされている。加えて、関連するその他のDPに関しても授業内において育成する観点を持って、2年間の中で断続的に取り組んでいることの報告もされている。それぞれの教員が、最も関連のあるDPを中心として、関連するDPに関しても育成を図る視点をもった授業がなされることにより、充実した人材育成が行われたと考えられる。今後は関連する分野、科目の教員同士で、連携、協働して人材育成を図るといった、教員間、学科での視点からも検討していく必要があると思われる。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

《児童教育学科のディプロマ・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的とし、一般教養科目のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（教育学）にふさわしいものとします。

- ① 教育・保育に必要な専門性：教育・保育に必要な専門的な指導力を習得するとともに、それらを活用・実践する力を有する。
- ② 課題解決能力：教育・保育の課題解決に必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力・人間関係調整能力等を有し、現場で実践できる。
- ③ 豊かな人間性：教育的な情熱や使命感・倫理観をもち、社会の変化に対応しながら、理想の教育・保育を目指して探究し向上しようとする態度を有している

① 専門性

令和5年度の児童教育学科卒業生のGPAを、令和4年度と比較しながら数値に分けて整理したものを以下に示す。

G P A	年度	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
児童教育学科全体	R5	80 名 (40.6%)	110 名 (55.8%)	7 名 (3.6%)
	R4	99 名 (54.1%)	80 名 (43.7%)	4 名 (2.2%)
小・幼・保コース	R5	31 名 (64.5%)	16 名 (33.3%)	1 名 (2.0%)
	R4	37 名 (80.4%)	9 名 (19.6%)	0 名 (0.0%)
幼・保コース	R5	49 名 (32.8%)	94 名 (63.1%)	6 名 (4.0%)
	R4	62 名 (45.3%)	71 名 (51.8%)	4 名 (2.9%)

児童教育学科全体では、令和4年度卒業生ではG P Aが「3.0 以上」の学生が半数以上を占めていたものの、令和5年度では3未満2以上の学生が全体の55.8%と増加傾向にある。特に幼保コースに顕著で、12%近くの変動が見られる。2未満となった学生も7 名おり下振れが見られる中、学修成果の質をいかに保つかが今後の課題となっていくと考えられる。

② 課題解決能力

現場で実践できる能力を示す根拠として、令和5 年度の児童教育学科卒業生の免許資格の取得状況は以下のようになっている。

小・幼・保コース	卒業生数	取得者数	取得割合
小学校教諭二種免許状	46	43 (45)	93.5% (97.8)
幼稚園教諭二種免許状		43 (46)	93.5% (98.6)
司書教諭資格		15 (11)	32.6% (23.9)
保育士証		44 (44)	95.7% (95.7)
ピアヘルパー資格		8 (1)	17.4% (2.2)

幼・保コース	卒業生数	取得者数	取得割合
幼稚園教諭二種免許状	144	135 (129)	93.8% (94.2)
保育士証		135 (132)	93.8% (96.4)
ピアヘルパー資格		8 (22)	5.6% (16.1)
認定絵本士		16 (25)	11.1% (19.2)

(括弧内は令和4年度の数値)

免許の取得状況は、令和4年度と5年度の間に大きな違いはなく、教育・保育の課題解決に必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力・人間関係調整能力等を有し、現場で実践できる人材として、それぞれの資格・免許を持った学生を育成することができた。その結果、令和5年度の「就職及び進学状況・率」は、91.8%となり、就職や進学を希望した全ての学生が、自身の将来を切り開いていく課題解決能力を育成することができたと判断する。

③ 豊かな人間性

本学科では地域を志向した教育・研究・社会貢献を促すCOC 関連科目として1 年次3 科目、2 年次9 科目が開講されている。

中でも1 年次の「キャリアガイダンス」では、附属幼稚園とのオンライン授業参観を通して具体的な保育内容や環境、幼児との関わりを見て学び、実習前には市内幼稚園での実務経験者による講話を通して職務や現場で求められる資質に関して具体的なイメージをもたせることができた。また、小幼保コース「小学校教職実践演習」では、小学校での授業参観を通して将来に向けた心構えや教師像の構築に繋がれたと考える。

さらに、小幼保コース選択科目「環境教育演習」では、屋久島での合宿研修を通して地域の自然環境や農業、食育にふれ、同じく「社会」の中で、枕崎や知覧での多様な体験を通して社会科における農業、水産業の教材化等について考察を行った。実際に地域を踏査することで地域理解が深まり、各地域のよさを踏まえて授業ができるような教師になろうという意欲が高められた。

これに加えて、両コース対象の「社会福祉」「子育て支援」では、地域の福祉的課題や福祉ニーズに即した講義、子育て支援に関する事例検討により、県内の社会福祉の動向と課題理解、対応の視点を習得させることができた。このことからCOC 関連科目による多様な学びを通して地域理解を深め、課題に向き合い、地域活性化の担い手として活躍できるような資質の基礎を培うことができた。

その結果、令和5 年度卒業者196名の「就職及び進学状況・率」は、91.8%であり、専門職への就職の内訳は、以下の通りである。

	小学校	幼稚園	こども園	保育所	福祉施設
R5：91.8%	12.2%(24人)	7.7%(15人)	29.1%(57人)	29.6%(58人)	10.2%(20人)
R4：96.7%	12.2%(22人)	11.7%(21人)	27.3%(49人)	34.6%(62人)	10.6%(19人)

さらに年度を遡ると、内訳に変動があることが見てとれ、それぞれの学生が各自の特性に見合った専門性を見出していることが推測できる。

一方で、科目全体に目を向けると「豊かな人間性」に焦点を当てる科目は限定的であるものの、潜在的に関与しうる科目が多数あることから、教員間で連携を取りながら育てたい人間像と各科目でできることを確認し合う作業が必要かもしれない。

2. 生活科学科生活福祉専攻

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

1) 入学試験

○総合型選抜

総合型選抜で令和6年度に入学した学生は1名（一期）であった。アピールシートおよび面接の各判定項目も基準点数以上であった。令和5年度入試では、総合型選抜で入学した学生はいなかった。そのため、試験結果の経年比較検証は行えない。

○学校推薦型選抜（指定校型）

学校推薦型選抜（指定校型）で令和6年度に入学した学生は2名であった。この2名の「小論文」試験結果について検証する。「小論文」試験結果は、2名とも合計点が基準点に達しており、評価基準もすべての項目で基準点以上であった。可否は、「小論文」試験と「調査書」の結果を総合的に判定する。「調査書」との総合判定から、生活福祉専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となった。

R5 年度入試では、学校推薦型選抜（指定校型）で入学した学生は2名であった。この2名の「小論文」試験結果について検証する。「小論文」試験結果は、2名ともわずかに合計点が基準点に達していない。評価基準別にみると、

- ・ 出題意図に沿っているか……基準点以上：1人、基準点以下：1人
- ・ 意見は明確か ……基準点以上：1人、基準点以下：1人
- ・ 論理的一貫性があるか ……基準点以上：2人
- ・ 分量が8割以上 ……基準点以上：2人
- ・ 誤字・脱字ほか ……基準点以上：1人、基準点以下：1人

であった。可否は、「小論文」試験と「調査書」の結果から総合的に判定され、生活福祉専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となった。

総合型選抜と学校推薦型選抜（指定校型）について、令和6年度と5年度入学者との試験結果を単純に比較すると、令和6年度は全受験者が入学基準点を超過しており、5年度よりもよい試験成績を修めている。

2) 新入生アンケート

入学した4月に「新入生アンケート」が、実施されている。本専攻の入学者全員が、アドミッション・ポリシーをよく読み理解し受験したと回答している。入学者に、アドミッション・ポリシーは浸透している。

3) 入学前教育

入学前教育として、「介護福祉に関する新聞のスクラップ集作り」と高校までの学習を振り返る問題集型式の「ワークブック1」を仕上げることを求めている。入学者全員、両課題の取り組み成果の提出があり、指導教員がチェックを行っている。「ワークブック1」については、5月に学習効果の確認のために、試験を実施した。指導教員は面談の際に、入学前教育によって専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物に成長したか確認を行っている。試験と面談の結果から令和6年度も令和5年度に続き、入学生全員が、生活福祉専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物により一層成長したと確認した。

令和6年度の「新入生アンケート」によれば、入学前課題の量についての回答は、「適量」が57.1%、難易度は「大変難しかった」が71.4%との回答であった。令和5年度アンケートの入学前課題の量についての回答は、「ちょうどよい」が80.0%、難易度は「易しかった」と「やや易しかった」の合計が

80.0%であった。難易度の評価は2学年間で大きく異なったが、入学前課題「ワークブック1」は高校までの学習の振り返りができるものである。短大での学習の準備のためにも、今後も「ワークブック1」を入学前課題として用い、基礎学力のupを目指していく必要があると考える。

4) アドミッション・ポリシー関連に関する総合評価

以上の検討結果から令和6年度も5年度に続き、生活福祉専攻に入学した学生については、受験時からアドミッション・ポリシーは浸透しており、専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物が合格している。入学前教育もアドミッション・ポリシーにより叶う人物への成長に貢献していると確認できる。

〈参考資料〉

《生活科学科生活福祉専攻のアドミッション・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉や医療・福祉事務の知識と実践的な福祉的援助の基礎を学ぶことを通じて、生物的・社会的存在としての人間を理解し、将来、福祉、保健医療等の現場で使命感をもって働くことができる人材の育成を目指しています。

本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、介護福祉に対する探究心を有し、現実の社会問題に関心を向けつつ、介護福祉士や介護事務・医療事務に関する資格取得を目指す人を求めます。

- (1) 高等学校程度の教育課程を幅広く修得することを通じて、文章読解力や文章表現力、政治・経済・社会の仕組み等に関する基本的な知識及びコミュニケーション能力を身につけている人
- (2) 多様な人々への支援を通じて、社会に役立つ仕事をしたい人
- (3) 人々の喜びや悲しみを自分のこととして共感し、他者と協働することができる人
- (4) 幅広い教養を身につけて、深い人間理解ができる人

(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証

○試験とその結果としての成績評価・GPA

令和5年度の生活福祉専攻卒業生の平均GPA（最高：最低）を以下に示す。

平均GPA	1年次－R4－	2年次－R5－
生活福祉専攻	2.92 (3.42 : 2.16)	2.94 (3.54 : 1.79)

卒業時の平均GPAは「2.5」を超える。進級に併せて専門的技術、知識の科目の内容が高度化していくが高い成績を修めた。学生個人に応じた学修支援が適切に進められた結果 GPA の上昇につながっているといえ、さらに学生は意欲低下せず学修できていると考えられる。

○修得単位数

令和5年度生活福祉専攻卒業生の平均取得単位数（最高：最低）を以下に示す。

平均修得単位数	1年次－R4－	2年次－R5－	総修得単位
生活福祉専攻	64 (69 : 61)	51.6 (55 : 50)	115.6 (124 : 111)

全員の修得単位数は100単位を超えており、卒業に必要な最低修得単位数「62」を大幅に上回った。これは、介護福祉士の受験資格の取得に必要な最低取得単位数「100」が関係している。言い換えれば、介護福祉士の資格取得を目指し、適切な学修が行われた結果とも言える。また平均習得単位および最低総修得単位から、介護福祉士資格取得以外の科目も選択している。このことから学生は、自分自身の資格取得や教養、スキル向上に取り組んだと考える。

生活福祉専攻の専門科目には、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、ディプロマ・ポリシーと関連した、以下の3つの科目群がある。

- ① 専門科目
- ② 選択科目
- ③ 地域ニーズを踏まえ、地域に貢献する介護・福祉職に従事する者としての意識や知識・技能を高めるための科目

これら3つの科目群について、開講学期ごとの配当状況をまとめると以下の表ようになる。

科目群	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	計
① 専門科目	12	13	16	12	53
② 選択科目	2	5	2	3	12
③ 地域ニーズを踏まえ、地域に貢献する介護・福祉職に従事する者としての意識や知識・技能を高めるための科目	1	1	2	1	5
総科目数	15	19	20	16	70

基本的に、専門科目や専門関連科目の教育順序と系統性が考慮された科目配置になっていると考えている。

〈参考資料〉

《生活科学科生活福祉専攻のカリキュラム・ポリシー》

生活福祉専攻は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、専攻の専門教育を以下のように編成します。

(1) 専門科目には、介護福祉士養成課程を踏まえ、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」及び「医療的ケア」の領域に関する科目を順次性と系統性を考慮しながら配置する。

(2) 選択科目には、福祉に関連したレクリエーションや医療・福祉事務等に関する知識と技能を修得するための科目を配置する。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

○生活福祉 DP (1) 専門的知識・技能（介護福祉及び医療・福祉事務に関する実践的かつ体系的な専門的知識と技能を修得しているかどうか）の検証

「介護福祉士」国家試験の受験結果は、卒業生5名全員が合格であった。

次に、令和5年度の生活福祉専攻卒業生（5名）のGPAを、数値に分けて整理したものを以下に示す。

GPA	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
生活福祉専攻	4 名 (80.0%)	0 名 (0%)	1 名 (20.0%)

生活福祉専攻では、GPAが「3.0 以上」の学生が4名（80.0%）を占める。

また、令和5年度の「就職及び進学状況・率」（資格を活かした職種で就職した学生（／卒業生）の割合を算出）において、5名全員（100.0%）が福祉の専門職として就職している（令和6年4月1日現在）。

令和4年度卒業生も、GPAが「2.0 以上」の学生が9名（90.0%）を占めた。GPA「3.0 以上」は1名（10.0%）と少ないが、「2.5 以上」は6名（60.0%）であった。

また、令和4年度の「就職及び進学状況・率」（資格を活かした職種で就職した学生（／卒業生）の割合を算出）において、90.0%の学生が福祉の専門職として就職している。

これらの令和5年度および4年度卒業生の結果から、生活福祉専攻では、実践的かつ体系的な専門的知識と技能を十分に修得している学生を育成できたと判断される。

○生活福祉 DP (2) 主体的・創造的な課題解決能力の検証

令和5年度の卒業生の免許資格取得状況は以下の通りである。

生活福祉専攻	卒業生数	取得者数	取得割合
介護福祉士受験資格	5	5	100.0%
介護福祉士試験合格者数		5	100.0%
介護保険実務士認定証		5	100.0%
医事実務士認定証		2	40.0%
レクリエーション・インストラクター資格		3	60.0%
ピアヘルパー資格		4	80.0%

令和4年度の卒業生の免許資格取得状況は以下の通りである。

生活福祉専攻	卒業生数	取得者数	取得割合
介護福祉士受験資格	10	10	100.0%
介護福祉士試験合格者数		10	100.0%
介護保険実務士認定証		2	20.0%
医事実務士認定証		3	30.0%
レクリエーション・インストラクター資格		2	20.0%
ピアヘルパー資格		1	10.0%

これらの資格は地域の生活に必要なものである。特に、介護福祉士の教育課程の中の介護実習（学外実習）で、地域の社会的・人的課題に直面しながら、実践的に解決力が磨かれていく。令和5年度卒業生5名および4年度卒業生10名全員が介護福祉士の国家試験を突破し、資格取得していることから、地域の現場で生じる課題を主体的・創造的に解決できる能力と意識を在学中に身につけられたと判断される。

○福祉 DP（3）人間関係形成力とコミュニケーション能力の検証

本専攻では専門科目の中で、他者と自分との関わりを知り、コミュニケーションの意義を理解し、個人に応じたコミュニケーション方法を考えることができる科目を設けている。特に、「人間関係とコミュニケーション」、「コミュニケーションの基礎」、「コミュニケーション演習」および「ターミナルケア」などの科目である。2年間で4期にわたる学外での介護実習の中で、学外で人間関係の形成や多様な方々とのコミュニケーションを磨いている。学外実習先からの評価、講義や演習・実習の単位取得も令和5年度卒業生5名および4年度卒業生10名全員ができていることから、人間関係形成力とコミュニケーション能力を生活福祉専攻で身につけられたと判断される。

〈資料〉

生活福祉 DP（3）が◎になっている専門科目

- ・「人間関係とコミュニケーション」
- ・「コミュニケーションの基礎」
- ・「コミュニケーション演習」
- ・「ターミナルケア」

○学習成果

本学では、建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、以下に掲げる資質・能力を学習成果として設定している。

- 1 現代生活に即した専門的知識と実践的技能及び思考力・判断力・表現力と課題解決能力を有する。
- 2 豊かな情操と高い教養を有し、心身ともに健康で調和のとれた人間像を目指して自己啓発ができる。
- 3 地域活性化・国際化の意欲的な担い手としての素地を有する。

上記の学習成果を達成するために、「カリキュラム・ポリシー」及び「ディプロマ・ポリシー」に従って教育課程を編成し、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与している。

令和5年度卒業生も4年度に続き、生活福祉専攻を卒業した学生は、「カリキュラム・ポリシー」および「ディプロマ・ポリシー」の検証結果から、「カリキュラム・ポリシー」に沿って学修が進められ、「ディプロマ・ポリシー」に叶う人材が生活福祉専攻で養成されていることが確認された。

〈参考資料〉

《生活科学科生活福祉専攻のディプロマ・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉士として深い人間理解ができ、実践的能力を身につけた介護リーダー及び心身の状況に応じた最も適切な介護等を行うことができる人材の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（生活福祉）にふさわしいものとします。

(1) 専門的知識・技能

介護福祉及び医療・福祉事務に関する実践的かつ体系的な専門的知識と技能を修得している。

(2) 主体的・創造的な課題解決能力

修得した専門的知識と技能を活かして、地域社会の実態を踏まえ、主体的・創造的に貢献する能力と意識をもっている。

(3) 人間関係形成力とコミュニケーション能力

倫理観と責任感をもち、コミュニケーション能力と協働性を有し、多様な問題に臨む社会人としての態度を身につけている。

3. 生活科学科食物栄養学専攻

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

○学校推薦型選抜（指定校型）の受験者 28 人についての検証

小論文では、合計点の平均点は 100 点満点中 74.07 点で、基準点(60 点)に満たない者が 2 人（約 7%）であった。令和 4 年度は受験者 29 人、合計点の平均点は 68.38 点、基準点に満たない者が 5 人（約 17%）であり、本年度は令和 4 年度と比較し合計点の平均点が約 6 点増加し、基準点に満たない者が 3 人減少した。

表 1-1 で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験者数をみると、令和 4 年度同様に「誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ」が基準点に達していない受験生が他の評価基準に比べて多かった。

可否は、「小論文」試験と「調査書」の評価から総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

表 1-1 学校推薦型選抜（指定校型）における評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和 4 年度	令和 5 年度
出題意図に沿っているか	4 人	1 人
意見は明確であるか	2 人	2 人
論理的一貫性があるか	1 人	0 人
分量が上限の 8 割以上ある	0 人	2 人
誤字・脱字・表現上の誤り、 主述の乱れ	5 人	4 人
段落の要素があるか	- 1)	0 人

1) 令和 4 年度は評価基準なし

○学校推薦型選抜（公募型）の受験者 2 人についての検証

小論文では、合計点の平均点は 50 点満点中 36.50 点で、基準点(32 点)に満たない者はいなかった。令和 4 年度は受験者 4 人、合計点の平均点は 36.25 点で、基準点に満たない者が 1 人（25%）であり、本年度は令和 4 年度と比較し合計点の平均点は微増、基準点に満たない者は 1 人減少した。

表 1-2 で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験者数をみると、令和 4 年度は「分量が 8 割以上あり、誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ」のみで 3 人（75%）が基準点以下だったが、令和 5 年度は「意見は明確か」でのみ 1 人が基準点を下回った。

面接では、合計点の平均点は 50 点満点中 28 点であり、「入学の目的意識」、「就学意欲」、「態度」の各評価基準別とも、基準点を下回った者はいなかったが、令和 4 年度の合計点の平均点は 41 点であり、令和 5 年度は令和 4 年度と比較して低かった。

可否は、「小論文」試験と「面接」に加え、「調査書」の評価から総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

表 1-2 学校推薦型選抜（公募型）における評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和 4 年度	令和 5 年度
出題意図に沿っているか	0 人	0 人
意見は明確であるか	0 人	1 人
論理的一貫性があるか	0 人	0 人

分量が上限の 8 割以上あり、誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ	3 人	0 人
段落の要素があるか	- 1)	0 人

1) 令和 4 年度は評価基準なし

○総合型選抜（一期・二期・スポーツ全学科）の受験者 10 人についての検証

アピールシートでは、受験生の平均点が 50 点満点中 43.5 点で、基準点の 32 点を下回る者はいなかった。令和 4 年度も受験生 4 人の平均点が 44.5 点で、基準点を下回る者はいなかった。

評価基準別でも令和 4 年度同様に「志望理由及び自己アピールが十分に示されているか」、「気になるニュースの要約ができており、それに対する意見は明確であるか」、「入学したい意欲が感じられるか」、「分量が 8 割以上あるか」、「誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが 3 か所以下」とも基準点を下回る者はいなかった。

面接では、受験者の平均点が 50 点満点中 44.1 点（令和 4 年度は 45 点）で、令和 4 年度同様に基準点の 26 点を下回る者はいなかった。令和 4 年度も受験者の平均点が 45 点であり、基準点を下回る者はいなかった。

評価基準別でも令和 4 年度同様に「入学の目的意識」、「口頭試問への準備」、「態度」とも基準点を下回る者はいなかった。

可否は、「アピールシート」と「面接」に加え、「調査書」の評価から総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

○総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）の受験者 2 人についての検証

アピールシートについて、受験生 2 人の平均点が 20 点満点中 12.5 点（令和 4 年度の平均点は 17 点）で、令和 4 年度の受験生 4 人と同じく基準点の 10 点を下回る者はいなかったが、令和 4 年度の平均点と比べて低下した。

表 1-3 で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験者数をみると、令和 4 年度は、何れの項目も基準点を下回る者はいなかったが、令和 5 年度は「資格取得の動機／理由／目的等」は両名とも、「取得後の資格の活用」も 1 人が基準点を下回っていた。

表 1-3 総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）における
アピールシートの評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和 4 年度	令和 5 年度
資格取得の動機／理由／目的等	0 人	2 人
資格取得に対する取組や意欲	0 人	0 人
取得後の資格の活用	0 人	1 人

面接においても、受験者 2 人の平均点が 40 点満点中 30.5 点（令和 4 年度の平均点は 37.75 点）で、令和 4 年度の受験者 4 人と同様に、基準点の 20 点を下回る者はいなかったが、令和 4 年度と比較して平均点は低下した。

表 1-4 で示すように評価基準別に基準点に満たなかった受験者数をみると、令和 4 年度は、何れの項目も基準点を下回る者はおらず、「資格の理解」、「入学の目的意識及び本学で学ぶことへの熱意」では全員が 8 点満点であった。令和 5 年度は「資格の取得状況」のみ全員が 8 点満点で、「面接時の質問に対する受け答えや態度」は 1 人が基準値を下回っていた。

表 1-4 総合型選抜（専門系・食物栄養学専攻Ⅰ）における
面接の評価基準ごとの基準点に満たなかった受験者数

	令和 4 年度	令和 5 年度
資格の理解	0 人	0 人
資格の取得状況	0 人	0 人
資格取得への取組により得られた効果	0 人	0 人
入学の目的意識及び 本学で学ぶことへの熱意	0 人	0 人
面接時の質問に対する受け答えや 態度	0 人	1 人

合否は、「アピールシート」と「面接」に加え、「高校時代に取得した資格」を加味して総合的に判定し、食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物と評価され、合格となっている。

○入学前教育

入学前教育として、「栄養バランスの良い朝ごはん作り」、割合や濃度の「計算問題」および「描いてみよう あなたのキャリアプラン」の 3 つを課している。

令和 4 年度は「入学前のチャレンジクッキング」として課題献立（ご飯、ハンバーグと付け合わせ、和え物、かき卵汁）を課していたが、本年度から「栄養バランスの良い朝ごはん作り」に変更し、朝食献立を作成させ、使用した食材を 6 つの食品群別に分類、調理後、出来上がった料理写真とともに、調理時に工夫したことや食べた感想をレポートとしてまとめたものを専攻教職員が評価することでアドミッション・ポリシーの（2）と（3）の確認を行った。また、課題献立を入学後の「調理学実習基礎」での実技試験課題とすることでも評価も行っている。

「計算問題」では、令和 4 年度同様に実習や実験などで必要となる計算方法の理解を評価することで、アドミッション・ポリシーの（1）の確認を行った。

「描いてみよう あなたのキャリアプラン」では、令和 4 年度同様に学校生活での目標や、取得希望資格や免許証・免許状、就職について記入させ、入学後の面談や学生指導の資料として活用する際に、主としてアドミッション・ポリシー（3）の確認と評価を行った。

入学者 39 人中 39 人全員からすべての課題が提出され、令和 4 年度の 47 名の入学者同様に提出率は 100%であった。また、各教員による評価においても、大きな問題点は挙がってきていないが、今後も、評価に客観性を持たせるための方策についても検討する必要がある。

表 1-5 に示す入学後の「進学に関するアンケート」の集計結果では、入学前課題の量は何れの年度においても「ちょうどよい」が大半を占めていた。難易度に関しては、令和 4 年度は「やや易しかった」、「易しかった」が大半を占める一方で、「やや難しかった」、「大変難しかった」と回答した入学者も一定数存在していたのに対し、令和 5 年度は「やや難しかった」が半数を占め、「やや易しかった」、「易しかった」とほぼ拮抗していた。令和 4 年度の入学後の面談等での聞き取りでは、「計算問題」での躓きによるものが「難しかった」と感じた原因の大部分であったため、令和 5 年度からは、専門教員による解説動画を作成して活用することにした。その結果、入学後の「化学」の受講者に対して行った濃度の問題の正答率は上昇しており¹⁾、学生からも動画が理解の役に立ったという声があったため、動画作成の効果は見られたものと思われる。

表 1-5 進学に関するアンケートの結果

	入学前課題の量			難易度	
	令和 4 年度	令和 5 年度		令和 4 年度	令和 5 年度
多い	2%	2%	大変難しかった	9%	4%
やや多い	16%	11%	やや難しかった	27%	50%

ちょうどよい	73%	85%	やや易しかった	53%	26%
もう少し多くてもよい	9%	2%	易しかった	11%	20%

今後は、個々の理解度がより明確になる評価とその対応策を検討し、入学者のアドミッション・ポリシーに基づいた成長に繋げていく必要があると思われる。

- 1) 例えば、「12%の食塩水 200mL と、7%の食塩水 300mL を混ぜたら何%の食塩水ができますか？」という問題では、令和4年度の29名の受講者の正答率が79.3%であったのに対し、令和5年度の19名の受講者においては84.2%となっている。

○進学に関するアンケート

入学後に行う「進学に関するアンケート」では、生活科学科食物栄養学専攻の「アドミッション・ポリシーをよく読み理解して受験したか」という設問に対し、令和5年度は94%、令和4年度も87%が「はい」と回答しているため、入学者にはアドミッション・ポリシーが浸透しているとみなせると考えられた。

以上の検討結果から、食物栄養学専攻に入学した学生については、受験時からアドミッション・ポリシーは浸透しており、専攻のアドミッション・ポリシーに叶う人物が合格している。入学前教育もアドミッション・ポリシーにより叶う人物への成長に貢献していると確認できる。

《生活科学科食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシー》

食物栄養学専攻は、給食実務に強く、的確な栄養指導と食教育ができる栄養士及び健康の基盤である食物と栄養についての専門知識と技術を身につけ、地域社会の人々の健康づくりに貢献できる人材の養成を目的としています。

本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育における基礎的学力を備え、健康の基盤である食物と栄養についての専門性を身につけようとする人
- (2) 食や健康に対する知的好奇心や旺盛で、自ら考えて食に関わる課題の解決に取り組むことができる人
- (3) 人と人とのつながりを大切にし、食を通して自分の可能性に挑戦できる人

□学習成果

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、以下に掲げる資質・能力を学習成果として設定している。

- 1 現代生活に即した専門的知識と実践的技能及び思考力・判断力・表現力と課題解決能力を有する。
- 2 豊かな情操と高い教養を有し、心身ともに健康で調和のとれた人間像を目指して自己啓発ができる。
- 3 地域活性化・国際化の意欲的な担い手としての素地を有する。

上記の学習成果を達成するために、以下のような「生活科学科食物栄養学専攻のカリキュラム・ポリシー」及び「生活科学科食物栄養学専攻のディプロマ・ポリシー」に従って教育課程を編成し、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与している。

(2) カリキュラム・ポリシーに基づく検証

○試験とその結果としての成績評価・G P A

令和 4 年度および 5 年度の生活科学科食物栄養学専攻卒業生の平均、最高および最低の G P A 値を表 2-1 に示す。

表 2-1 食物栄養学専攻卒業生の平均、最高および最低の G P A 値

卒業年度	令和 4 年度	令和 5 年度
1 年次	2.56 (3.92 : 1.29)	2.46 (3.95 : 1.13)
2 年次	2.63 (3.70 : 1.40)	2.67 (3.85 : 1.40)

※ 平均 G P A 値 (最高値 : 最低値)

G P A の最低値は、令和 4 年度卒業生の 1 年次「1.29」、2 年次「1.40」、令和 5 年 1 年次卒業生の「1.13」、2 年次「1.40」であった。令和 4 年度、5 年度とも G P A の最低値が「1.5」を下回っている学生は存在しているが、平均 G P A はほぼ「2.5」以上を維持しているうえ、2 年次の平均 G P A 値の方が若干ではあるが 1 年次の値より上昇している。表 2-2 に示す G P A 値の分布でも、何れの年度の卒業生においても 1 年次に比べ 2 年次の方が、G P A 「3.0 以上 4.0 未満」および「2.0 以上 3.0 未満」の割合が増加し、「1.0 以上 2.0 未満」(や「1.0 未満」)の割合が減少している。そのため、専攻として適切に学修が進められたと考えられる。

表 2-2 食物栄養学専攻卒業生の 1 年次と 2 年次の G P A 値の分布の割合

卒業年度	令和 4 年度		令和 5 年度	
	1 年次の G P A 値 の割合 (%)	2 年次の G P A 値 の割合 (%)	1 年次の G P A 値 の割合 (%)	2 年次の G P A 値 の割合 (%)
3.0 以上 4.0 未満	29.3	29.8	28.6	41.9
2.0 以上 3.0 未満	50.0	59.6	35.7	44.1
1.0 以上 2.0 未満	19.0	10.5	35.7	14.0
1.0 未満	1.7	0.0	0.0	0.0

○修得単位数

令和 4 年度および 5 年度生活科学科食物栄養学専攻卒業生の平均修得単位数 (最高 : 最低) を表 2-3 に示す。

表 2-3 食物栄養学専攻卒業生の平均修得単位数

卒業年度	令和 4 年度		令和 5 年度	
平均修得単位数 (最高 : 最低)	1 年次	2 年次	1 年次	2 年次
	55.6 (69 : 47)	26.2 (46 : 16)	49.5 (65 : 35)	29.5 (42 : 17)
総修得単位	81.8 (113 : 69)		77.9 (107 : 63)	

※ 平均修得単位数 (最高 : 最低)

令和 4 年度卒業生の総修得単位数平均は、「81.8」、最低値は「69」、令和 5 年度は「77.9」、最低値は「63」であり、卒業に必要な最低修得単位数「62」を超えているが、修得単位数は減少している。これは、新たに「こども食物アレルギー実務課程」関連科目を導入するにあたってカリキュラムを見直して、免許・資格の取得に必要な最低修得単位数 (栄養士免許 : 栄養教諭二種免許状) が、令和 4 年度卒業生では「70 : 98」であったのが、令和 5 年度卒業生では「68 : 95」に減っていることや、令和 4 年度卒業生より 5 年度卒業生の栄養士免許および栄養教諭二種免許状の取得割合が減少していることが影響していると考えられる。しかし、卒業に必要な最低修得単位数は十分に確保できているため、専攻として適

切に学修が進められたと考えられる。また、1 年次と 2 年次の平均修得単位数を比べると、R4 年度は 29.4 単位、R5 年度は 20.0 単位も 1 年次の方が多くなっていて、修得単位数の偏りが見られる。これは、2 年次の実験・実習科目と選択科目数の増加によるものであり、科目の順序性を保持したカリキュラムという観点から、また学外実習や就職活動等に十分な時間を確保できる面でも、現状を大きく変える必要性はないと考えられる。

生活科学科食物栄養学専攻の専門科目には、生活科学科食物栄養学専攻カリキュラム・ポリシーを踏まえ、生活科学科食物栄養学専攻ディプロマ・ポリシーに関連した、以下の 3 つの科目群がある。

- ① 食物・栄養に必要な専門性
- ② 課題解決能力
- ③ 豊かな人間性

これらそれぞれの科目群について、開講学期ごとの最も関連の深い DP の配当状況をまとめると表 2-4 のようになっている。

表 2-4 令和 5 年度食物栄養学の開講学期ごとの最も関連の深い DP の配当状況

科目群	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	各 DP 計
①必要な専門性	12	10	7	10	39
②課題解決能力	1	3	6	2	12
③豊かな人間性	4	2	6	4	16
総科目数	17	15	19	16	67

※令和 5 年度入学生カリキュラムマップおよび学生便覧参照

以上のように全体の総科目数については、各期の配当状況はバランスが取れているといえる。それぞれの DP に最も関連が深い科目数は、「DP (1) 食物・栄養に必要な専門性」が 39、「DP (2) 課題解決能力」が 12、「DP (3) 豊かな人間性」が 16 である。本専攻の科目配置は、「社会生活と健康」、「人体の構造と機能」、「食品と衛生」、「栄養と健康」、「栄養の指導」および「給食の運営」の 6 分野を主軸とする栄養士養成課程を踏まえ、まず健康の基盤となる食物と栄養に関する専門知識と技能を身につけさせる。次に、身につけた専門知識と技能に基づいて、地域や現代社会の食に関する課題解決の方法を学び、学内における COC 科目や 2 年次の学外実習で人々の健全な食生活の実践に貢献できるようにする。これらの学びを通して、協調性や豊かな人間性の基礎である心情や意欲を育むことで豊かな人間性が身につくように設定されている。このように、体系的かつ系統的に科目が配置され、科目の順序性を保持したカリキュラムとなっている。以上より、専攻として適切に学習が進められたと考えられる。

(3) ディプロマ・ポリシーに基づく検証

○食栄 DP (1) 食物・栄養に必要な専門性（健康の基盤となる食物と栄養に関する専門的な知識と技能を修得し、時代と社会の要請に応える力を有しているかどうか）の検証

生活科学科食物栄養学専攻では、栄養士の資質向上と質の均一化を図るために実施されている栄養士実力認定試験を毎年受験している。栄養士実力認定試験は、健康の基盤となる食物と栄養に関する専門的な知識を問う問題を中心に出题されているため、十分な知識や実力をつけた上で受験に臨めるように、令和 4 年度入学者（令和 5 年度受験者）からは新設科目として「栄養士実力試験対策演習」を立ち上げている。令和 4 年度および令和 5 年度の栄養士実力認定試験の結果を表 3-1 に示す。本学の平均点は 4 年制大学を含む全国平均点には及んでいないが、令和 4 年、5 年度とも短期大学平均点よりは上回っており、修業年限 2 年の栄養士養成校の水準は保っていることがわかる。

表 3-1 令和 4 年度および令和 5 年度の栄養士実力認定試験の結果

正答率	60%以上	40～59%	39%以下	平均点		
	A 判定	B 判定	C 判定	本学	短期大学	全国
R4 年度結果	51.9 %	46.3 %	1.9 %	52.98	52.43	56.91
R5 年度結果	56.4 %	41.0 %	2.6 %	51.87	49.84	53.43

次に、令和 4 年度および 5 年度の食物栄養学専攻卒業生の G P A 値を、「3.0 以上」、「3.0 未満 2.0 以上」、「2.0 未満」の 3 区分に整理したものを表 3-2 に示す。

表 3-2 令和 4 年度および令和 5 年度食物栄養学専攻卒業生の G P A 値の分布

G P A	卒業年度	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
生活科学科 食物栄養学専攻	R4	16 名 (28 %)	33 名 (58 %)	8 名 (14 %)
	R5	18 名 (42 %)	19 名 (44 %)	6 名 (14 %)

※ 実人数 (割合)

令和 5 年度の卒業生では、G P A が「3.0 以上」の学生の割合が令和 4 年度と比較して 10%以上増加している。G P A 「2 以上」でみると、令和 4 年度、5 年度ともに 86%であり、8 割を超える結果となっている。G P A 「2.0 未満」の割合は、令和 4 年度、5 年度とも 14%であるが、表 2-1 で示しているように、通年での G P A が「1.0」を下回る学生はいない。また、表 3-3 に示すように、食物や栄養の知識や技術を活かした職種で就職および進学した学生 (／卒業生) の割合は、例年 8 割前後の学生が食物・栄養の知識や技術を活かした就職、進学をしている。

表 3-3 就職および進学者の割合 (／卒業生) と食物や栄養の知識や技術を活かした職種での就職および進学した学生の割合 (／卒業生)

卒業年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
就職および進学者の割合 (／卒業生)	90.5%	96.5%	90.7%
食物や栄養の知識や技術を活かした職種で就職および進学した学生の割合 (／卒業生)	81.0%	78.9%	81.4%

※ 「食物や栄養の知識や技術を活かした職種」では、栄養士や調理員としての就職以外に、食関連企業への就職者を含んでいる。

さらに、表 3-4 で示す学生満足度調査の結果 (2 年生分のみ、1 年生分は参考資料) でも、『本学での学びを通して、自分は成長できたという実感がありますか。』という設問に対し、85%以上の学生が『実感がある』、『やや実感がある』と回答している。「本学の教育方針・教育内容について、該当するものを選択してください。」という設問に対しても、8 割以上の学生が『満足』、『やや満足』と回答している。

表 3-4 学生満足度調査の結果

項目／卒業年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
成長実感について	87.8%	86.8%	91.7%
教育方針・教育内容について	90.2%	81.1%	83.3%

※ 「成長実感について」は『実感がある』、『やや実感がある』と回答した学生の割合、「教育方針・教育内容について」は、『満足』、『やや満足』と回答した学生の割合を示している。

これらの結果からみて、専門的な知識と技能を修得し、時代と社会の要請に応える力を有している学生を育成できたと判断される。

○食栄 DP (2) 課題解決能力の検証

令和 4 年度および 5 年度卒業生の免許資格取得状況は表 3-5 の通りである。

表 3-5 卒業生の免許資格取得率 (%)

免許資格／卒業年度	令和 4 年度	令和 5 年度
栄養士免許証	96.5	90.7
栄養教諭二種免許証	10.5	7.0
フードスペシャリスト	14.0	- ¹⁾
専門フードスペシャリスト (食品開発) 受験資格	0.0	- ¹⁾
専門フードスペシャリスト (食品流通・サービス) 受験資格	1.8	- ¹⁾
こども食物アレルギー実務課程修了証	- ²⁾	100.0
日本茶アドバイザー資格	26.3	18.6
ピアヘルパー資格	7.0	2.3

※ 各免許資格の取得率は、卒業生数に対する割合で示しており、令和 4 年度と令和 5 年度の卒業生数は、それぞれ 57 名と 43 名であった。

- 1) 「フードスペシャリスト」および「専門フードスペシャリスト」の資格は、令和 4 年度卒業生まで取得可能で、カリキュラムの変更により令和 5 年度卒業生からは取得できなくなっている。
- 2) 「こども食物アレルギー実務課程修了証」は、令和 5 年度卒業生から取得が可能になっている。

これらの免許資格は地域や現代社会の食に関わる身近な課題を見出し、それを解決に導くために求められる能力に必要なものである。特に、栄養士免許証取得のための給食管理実習（学外Ⅰ・Ⅱ）や栄養教諭二種免許証取得のための学校給食管理実習（学外Ⅰ）および栄養教育実習で、地域の社会的・人的課題に直面しながら、実践的に解決力が磨かれていく。「フードスペシャリスト」については近年資格取得希望者の減少がみられ、栄養士免許証取得を第一に考える多くの学生にとって、望ましい時間割編成を行うことが難しくなったため、令和 4 年度入学生から廃止した。一方、令和 5 年度からは、現代の栄養士に必要な知識と実践力を身に付けるための「こども食物アレルギー実務課程」を新設し、令和 5 年度卒業生全員に修了証を発行することができた。

表 3-3 で示したように例年 9 割以上の学生が就職や進学をしていることや、表 3-4 で示す学生満足度調査の結果からも、地域や現代社会の食に関わる身近な課題を見出し、それを解決に導くために求められる能力を在学中に身につけられたと判断される。

○食栄 DP (3) 豊かな人間性の検証

生活科学科食物栄養学専攻では、専門科目の中で食に関する幅広い知識・興味・関心に基づき、人が健全な食生活を送るために、他者と目的を共有し、協働できるように自らを高めることができる科目を設けている。下記の〈資料〉に挙げた「豊かな人間性の検証 が◎になっている専門科目」においては、ほとんどすべての科目履修者が単位取得できていること、表 3-3 で示す就職および進学者の割合でも 9 割以上の学生が就職や進学をしていること、表 3-4 で示す学生満足度調査の結果からも、成長実感や教育方針・教育内容について学生が充実感を得ていることから、豊かな人間性を身につけられたと判断される。

〈資料〉

食栄 DP (3) 豊かな人間性の検証 が◎になっている専門科目

- ・ 栄養指導実習Ⅰ
- ・ 栄養指導実習Ⅱ
- ・ 給食管理実習（学外Ⅰ）
- ・ 実践調理学実習

- ・くらしとお茶 A
- ・くらしとお茶 B
- ・教育心理学
- ・教育概論
- ・教育相談
- ・教育原理
- ・教育制度論
- ・特別支援教育
- ・道德教育の指導法
- ・栄養教育実習指導
- ・栄養教育実習
- ・教職実践演習（栄養教諭）

検証結果から、「カリキュラム・ポリシー」に沿って学修が進められ、「ディプロマ・ポリシー」を満たす人材が食物栄養学専攻で養成されていることが確認された。

4. 教養学科

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

アドミッション・ポリシー（以下 AP）に掲げている①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性、の3点について、入学試験と入学前教育課題が分析、検証対象となる。ただし、令和5年度入学者についても、4年度と同様、検証するのは入試のうち、学校推薦型選抜と総合型選抜とする。これら2つの選抜方法で、入学者の84%（令和4年度は約85%）を占めていることから、本学入学者の大勢の検証ができると考えた。

1.1 入学試験

(1) 学校推薦型選抜（指定校型）

判定は小論文と調査書による総合評価である。

○小論文

受験者37人（50人）について検証した。合計点の平均点は100点満点で74.09点（67.8点）、令和4年度と比較して、全体の平均点は6.29点高くなっている。各評価基準別の平均点は表1.1の通りである。

表 1.1 学校推薦型選抜（指定校型）小論文 評価基準別の平均点

	令和5年度			令和4年度		
	満点	基準点	平均点	満点	基準点	平均点
論理的一貫性があるか	40	20	26.06	40	20	24.65
意見は明確であるか	20	10	13.65	20	10	12.8
出題の意図に沿っているか	20	10	15.19	20	10	12.24
分量が上限の8割以上ある	10	10	9.55	10	10	9.8
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満である	6	6	5.69	10	10	8.4
段落の要素があるか	4	4	3.95	—	—	—
計	100	60	74.09	100	60	67.8

基準点（60点）に満たない者は2人（5.41%）で、4年度入試（12人、24%）より大きく減少した。評価基準別で基準点を下回っていた者は表1.2のとおりである。②を測る意見の明確性や論理的一貫性に関する部分に比べ、①を測る「誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ」がやや弱い傾向がみられるが、概ね評価基準を満たしていると考ええる。

○総合評価

調査書を含め、①～③を総合的に評価したところ、本学のAPを満たした学生が入学していると考えられる。

表 1.2 学校推薦型選抜（指定校型）小論文
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	令和6年度	令和4年度
論理的一貫性があるか	1人（2.7%）	8人（16%）
意見は明確であるか	2人（5.41%）	11人（22%）
出題の意図に沿っているか	0人（0%）	11人（22%）
分量が上限の8割以上ある	1人（2.7%）	1人（2%）

誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満である	4人 (10.81%)	15人 (30%)
段落の要素があるか	1人 (2.7%)	—

(2) 学校推薦型選抜（公募型）

判定は小論文と面接、調査書による総合評価である。

○小論文

受験者6人について検証した。合計点（50点満点）の平均点は35点で、令和4年度（受験者4人）と比較して2.75点高かった。各評価基準別の平均点は表1.3の通りである。

表1.3 学校推薦型選抜（公募型）小論文 評価基準別の平均点

	令和5年度			令和4年度		
	満点	基準点	平均点	満点	基準点	平均点
論理的一貫性があるか	20	10	12	20	10	13.25
意見は明確であるか	10	6	6.3	10	6	7.5
出題の意図に沿っているか	10	6	8.7	10	6	7.75
分量が上限の8割以上ある	5	5	5	10	10	3.75
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満である	3	3	1			
段落の要素があるか	2	2	2	—	—	—
計	50	32	35	50	32	32.25

基準点（32点）に満たない者は1人（16.67%）である。評価基準別で基準点を下回っていた者は表1.4のとおりである。

評価基準別では、「出題意図に沿っているか」「分量は上限の8割以上である」はいずれも基準点を上回っていたが、「誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満である」が基準点以下の者が3分の2に達している。昨年度は受験者の全員が基準点以下だったので、①の部分が弱い傾向は続いているが、概ね評価基準を満たしていると考ええる。②を測る意見の明確性や論理的一貫性に関する部分に比べ、①を測る「誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れ」がやや弱い傾向がみられるが、概ね評価基準を満たしていると考ええる。

表1.4 学校推薦型選抜（公募型）小論文
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	令和5年度	令和4年度
論理的一貫性があるか	1人 (16.67%)	0人 (0%)
意見は明確であるか	1人 (16.67%)	0人 (0%)
出題の意図に沿っているか	0人 (0%)	0人 (0%)
分量が上限の8割以上ある	0人 (0%)	4人 (100%)
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満である	4人 (66.67%)	
段落の要素があるか	1人 (16.67%)	—

○面接

受験者 6 人について検証した。合計点の平均点は 39.67 点（50 点満点）、基準点(26 点)以下の者はいなかった。令和 4 年度も同様であった。評価基準別の平均点は表 1.5 の通りである。

表 1.5 学校推薦型選抜（公募型）面接 評価基準別の平均点

	令和 5 年度			令和 4 年度		
	満点	基準点	平均点	満点	基準点	平均点
入学の目的意識	20	10	16.5	20	10	17.25
就学意欲	20	10	15.5	20	10	17.5
態度	10	6	7.67	10	6	7
計	50	26	39.67	50	26	41.75

評価基準別でも令和 4 年度同様、「入学の目的意識」「就学意欲」「態度」とも基準点を下回った者はいなかった（表 1.6）。

表 1.6 学校推薦型選抜（公募型）面接 評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	令和 5 年度	令和 4 年度
入学の目的意識	0 人 (0%)	0 人 (0%)
就学意欲	0 人 (0%)	0 人 (0%)
態度	0 人 (0%)	0 人 (0%)
合計点	0 人 (0%)	0 人 (0%)

○総合評価

調査書を含め、①～③を総合的に評価したところ、本学の AP を満たした学生が入学していると考え

る。

(3) 総合型選抜（一期・二期・スポーツ全学科）

判定はアピールシートと面接、調査書による総合評価である。

○アピールシート

受験者 14 人（昨年度 21 人）について検証した。受験者 14 人の平均点が 40.286 点(50 点満点)で、基準点(32 点)を下回る者はいなかった。令和 4 年度も同様であった。評価基準別の平均点は表 1.7 の通りである。

表 1.7 総合型選抜（一期～三期、スポーツ）アピールシート 評価基準別の平均点

	令和 5 年度			令和 4 年度		
	満点	基準点	平均点	満点	基準点	平均点
志望理由及び自己アピールが十分に示されているか	10	6	7.64	10	10	7.71
気になるニュースの要約ができ ており、それに対する意見は明 確であるか	10	6	7.57	10	6	7.71
入学したい意欲が感じられるか	20	10	15.07	20	6	15.67
分量が 8 割以上ある	5	5	5	10	10	9.76
誤字・脱字・表現上の誤り・主 述の乱れが 3 種類未満	5	5	5			
計	50	32	40.29	50	32	40.86

評価基準別では、「志望理由及び自己アピールが十分に示されているか」「入学したい意欲が感じられるか」「分量が8割以上ある」「誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3か所未満」は基準点を下回る者はいない。「気になるニュースの要約ができており、それに対する意見は明確であるか」が1人いたが、概ね評価基準を満たしていると考ええる。

表 1.8 総合型選抜（一期～三期、スポーツ）アピールシート
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	令和5年度	令和4年度
志望理由及び自己アピールが十分に示されているか	0人 (0%)	0人 (0%)
気になるニュースの要約ができており、それに対する意見は明確であるか	1人 (7.14%)	0人 (0%)
入学したい意欲が感じられるか	0人 (0%)	0人 (0%)
分量が8割以上ある	0人 (0%)	1人 (4.76%)
誤字・脱字・表現上の誤り・主述の乱れが3種類未満	0人 (0%)	

○面接

受験者14人（昨年度21人）について検証した。合計点の平均点が38.95点（50点満点）で、基準点（26点）を下回る者はいなかった。

表 1.9 総合型選抜（一期～三期、スポーツ）面接 評価基準別の平均点

	令和5年度			令和4年度		
	満点	基準点	平均点	満点	基準点	平均点
入学の目的意識	20	10	15.86	20	10	15.95
口頭試問問題への準備	20	10	14.64	20	10	15.14
態度	10	6	8.79	10	6	7.86
合計点	50	26	39.29	50	26	38.95

評価基準別では、「入学の目的意識」「態度」で基準点を下回った者はいなかったが、「口頭試問への準備」で基準点下回った者が1人いたが（表 1.10）、合計点では基準点を超えているので評価基準を満たしていると考ええる。

表 1.10 総合型選抜（一期～三期、スポーツ）面接
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	令和5年度	令和4年度
入学の目的意識	0人 (0%)	0人 (0%)
口頭試問問題への準備	1人 (7.14%)	0人 (0%)
態度	0人 (0%)	2人 (9.52%)
合計点	0人 (0%)	0人 (0%)

○総合評価

調査書を含め、①～③を総合的に評価したところ、本学のAPを満たした学生が入学していると考ええる。

(4) 総合型選抜（専門系・教養学科）

判定は面接、取得資格、調査書による総合評価である。

○面接

受験者 6 人について検証した。昨年度は受験者がいなかった。合計点の平均点が 52.33 点（60 点満点）で、基準点（36 点）を下回る者はいなかった。

表 1.11 総合型選抜（一期～三期、スポーツ）面接 評価基準別の平均点及び
評価基準別基準点を下回った者の人数・割合

	満点	基準点	平均点	基準点を下回った者
資格取得の経緯や活用	10	6	9.17	0 人（0%）
高校時代の学びや活動への取り組みおよびそこから得られた効果	10	6	8.83	0 人（0%）
本学教養学科入学の目的意識	10	6	8.67	0 人（0%）
本学教養学科で学ぶことの熱意	10	6	8.5	0 人（0%）
面接時の質問に対する受け答え	10	6	8.5	0 人（0%）
面接時の所作・言葉遣い	10	6	8.67	0 人（0%）
合計点	60	36	52.33	0 人（0%）

○総合評価

資格取得を 40 点満点で換算したものと調査書を含め、①～③を総合的に評価したところ、本学の AP を満たした学生が入学していると考ええる。

1. 2 入学前課題

令和 5 年度入学生への入学前課題は、全員対象課題の「課題 1 新聞の切り抜き」「課題 2 気になる仕事を調べる」と、選択課題の「課題 3 読書の記録」「課題 4 生き方のモデルになる方を探す」があり、すべて入学後の提出としている。

(1) 分量と難易度

「2023 進学に関するアンケート結果」（令和 5 年 4 月実施）では、分量については「ちょうどよい」54%、「やや多い」24%、「多い」21%、「もう少し多くてもよい」1%であった。難易度については「やや難しかった」51%、「やや易しかった」30%、「易しかった」12%、「たいへん難しかった」7%であった。令和 4 年度と比較して、5 年度は量が「多い」と「ちょうどよい」に二極化してきている。難易度については「難しい」と思った学生の割合が増加している。令和 4 年度入学生は課題 2 が選択課題だったので、令和 5 年度入学生は課題が実質増えている。それで量が多い、難しいと感じる学生の増加につながった可能性がある。

表 1.12 入学前課題の量・難易度に関する意識

		令和 5 年度	令和 4 年度
量	多い	16 人（21%）	9 人（10%）
	やや多い	18 人（24%）	25 人（26%）
	ちょうどよい	41 人（54%）	58 人（61%）
	もう少し多くてもよい	1 人（1 人）	3 人（3%）
難易	たいへん難しかった	5 人（7%）	3 人（3%）
	やや難しかった	39 人（51%）	42 人（44%）
	やや易しかった	23 人（30%）	31 人（33%）

	易しかった	9 人 (12%)	19 人 (20%)
--	-------	-----------	------------

(出典：「進学に関するアンケート」各年度 4 月実施)

学科で分量・難易度について協議した結果、令和 6 年度も従来通りの課題の量・内容にすることとなった。

(2) アドミッション・ポリシー 3 項目の検証

冒頭①～③を検証するにあたっては、それぞれの課題で提示していた指示内容と、次ページの表 1.13 のように対応させた。ここでは全員対象の課題について、入学者 75 人のうち期日までの課題提出者 74 人、うち退学予定者への返却を除く 73 人分の提出物について検証した。

① 高校教育の基礎的知識・技能

○ 切り抜いた記事の種類 (多視点か)

便宜上、政治、経済、国際、コロナ、医療・福祉、教育・子ども、技術、文化・スポーツ、地域、観光、環境、ジェンダー・性、の 12 分野とその他に分類した。すると、1 分野：9 人(11.0%)、3 分野：4 人(5.5%)、4 分野：7 人(9.6%)、5 分野以上：53 人 (72.6%)であった。新聞切り抜きをしていない人が 1 人いた。その他では事件・事故や震災関連のニュースが多かった。取り上げた平均記事数は 1 人当たり 13.5 で、多くの学生が様々な分野のニュースを取り上げている。

○ きっかけに具体性がある (自身の経験に結びついている)

きっかけの具体性については、学生により差があった。

表 1.13 入学前課題の内容とアドミッション・ポリシーとの関連

			(1) 高校教育の 基礎的知識・技能	(2) 思考力・判断力・表現力と 課題解決に取り組む姿勢 ①思考力、②判断力、③表現 力、④問題解決に取り組む姿勢	(3) 意欲と 協調性の うち、 「意欲」
全 員	課題1 新聞の切 り抜き	a. 切り抜きを貼る	○切り抜いた記事の種類 (多視点か) ○きっかけに具体性がある (自身の経験に結びついて いる) ○検索方法 (ネット・リアル)	①②③自分の意見が明確であ る。	分量 ・ 記事数 ・ 記述量
		b. 切り抜きのきっかけ を書く			
		c. 考えたことや感想			
	課題2 気になる 仕事を調 べる	a. 調べた会社の名前・ 職種		④「目指すために必要なこと」 が具体的である。	分量
		b. 調べて分かったこと を書く			
		c. 調べて疑問に思った ことを書く			
		d. その会社やその職種 を目指すために必要な ことを書く			
選 択	課題3 読書の記 録	a. 本のデータ	○きっかけに具体性がある (自身の経験に結びついて いる)	①②③自分の意見が明確であ る。	分量 ・ 読書量 ・ 記述量
		b. 読んだきっかけ			
		c. 考えたこと・感想を 書く			
		d. 覚えておきたい言 葉、良かったところを 書き写す			
	課題4 生き方の モデルに なる方を 探す	a. 紹介したいステキな 方を書く	○a. ～c. に一貫性がある	④「どうすればよいか」が具体 的である	分量
		b. その方のどこが魅力 的なのかを書く			
		c. その方に近づくため にどのようなことをす れば良いかを書く			

「聞いたことがなかったので気になったから」、「地元で起こった事件だったので驚いたから」、「見出しの内容をみて、どのようなことなのか知りたいと思ったから」、「私も行ったから」、「大きな見出しに目をひかれ、市内でこのようなことがあったのを初めて知ったため」、「保育系のニュースに興味があるので、どんなニュースだろうと気になったから」などというレベルのものも多くあった。

一方、きっかけがかなり具体的に記載されているものもあった。

・大人の代わりに日常的に家族の世話や家事を担うヤングケアラーという記事を見て気になったから。ヤングケアラーという言葉を知り、驚いた。これから関係していく可能性もあるのでこの機会にもっと知っておこうと思った。

・東日本大震災から明日で12年になる。私が生きているときに起きた、過去で一番大きな震災だった。津波がどこかの街を飲み込んでいく様子を、私は当時何度も目にしていた。生きていて、テレビで何が起こったかを見ていたから知っているが、あくまで目にしたのはテレビの映像にすぎなかった。ただ、それ

でも見ているとショックはあった。12 年目になる前日のニュースであったが、未だに見つかっていない方も数多くいると示されたこの記事が目にとまり、切り抜こうと思った。

・見出しを見て、とても驚きました。自分の住む、この鹿児島県の政治業界に、まだそんな風潮があるのかと。同時にとても悲しかったです。／もっと女性が活躍する場が増えてほしい、声を上げる女性が増えてほしいと思い、記事を切り取りました。

・仮想通貨のことを余りよく知らなかったもので、どんなものでどんな規制がかかるのか知りたかったから。仮想通貨を使うメリット・デメリット、私たちの生活にどのような影響があるのかなど興味を持ったから。資金流出の危険性はどれくらいあるのか知りたかったから。世界から見た仮想通貨に対する考え方や規制を知りたかったから

ところで、きっかけの具体性に欠けるものの中には、これまで関心がなかった分野の記事にもアプローチした努力の跡が見られるものがある。きっかけの具体性が弱くても、以下の(3)意欲、の指標として用いた感想の分量がきっかけの記述に比べてかなり多い学生もいたからである。きっかけが具体的でない（加えて記述量が少ない）ことは、①これまでの学びや経験が定着していない、②こちらからの課題の指示が伝わっていない、③これまでの学びと世の中のニュースの話題を関連づけることができない、の3つがあると考えられる。

○検索方法（ネット・リアル）

紙媒体の新聞か、ネット記事かについては、課題に取り組んだ 72 人のうち、すべて紙媒体の学生が 49 人（68.1%）、すべてネット記事が 15 人（20.8%）、紙媒体・ネット記事混合：8 人（11.1%）であった。

②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢

○思考力・判断力・表現力

「課題 1 新聞記事の切り抜き」の「感想」について、自分の意見の明確性を検証指標とする。上述した「きっかけの具体性」同様、感想欄の意見の具体性にも差が見られる。

・国が示した指針案に対し、地方自治体がどのように具体的な支援を行うか知りたい。一方的に公的機関か専門家と話し合っただけでなく、当事者やその家族やサポートする人びとに直接アンケートを取り、生の声を聞くということは重要なことであると思う。障害をもっていることは本人の責任ではないのに、QOL を下げてしまう大きな要因の一つになってしまうことがあるため、しっかりとした支援が必要だ。また同時に障害者をサポートする側にも支援が必要であろう。【強度行動障害に支援を_厚労省 自治体の指針案提示】

・同じことを経験した人たちで集まったらどうなるんだろうと、依存症にマイナスなイメージを持っていたが、読み進めるうちに仲間同士が会うことで孤立から解放され、抑圧されない対等な関係の中で、情報を交換し、体験を語り合い、感情を表現する。そうした出会いを通して、ありのままの自分が仲間を受け入れることができるようになるのは良いことだと思った。病院に行くのに抵抗がある人たちが抵抗感を少なく始めることができそうだった。【依存症からの回復 オンラインで支え合う】

・選挙の投票ができる年になり、今までより選挙について深く考えるようになりました。自分の中の意見や思想と重なっている立候補者を見つけて、鹿児島県がよりよくなるようにしていきたいと思います。鹿児島県の代表となる方たちなので、決して軽く考えて投票せずに、考えて投票する方を選ぼうと改めて思いました。【鹿児島県議選きょう告示】

・記事には、大学生が脱炭素実現のための地方行政の役割について議論している一部が記載してあった。その中の「脱炭素のメリットとデメリットを示すことが必要だ」「脱炭素への投資は、省エネや効率化、燃料費削減に結びつく。だが、個別企業にとってはコストの増加になることもある」という部分を読んで、私の漠然としていた「公害問題の難しさ」が少し明確になった気がした。一言に脱炭素化といっても、それには企業側からすれば、コストも時間もかかるとなると動き出すタイミングも難しいのではないかと思う（以下略）。【公害地域の歴史 いま学ぶ意味（大阪公立大学 除本理史教授）

一方で、「〇〇がなくなつてほしい」「〇〇になればよいと思う」など、他人事感が表れている感想も少なからずみられた。

○課題解決に取り組む姿勢

「課題 2 気になる仕事を調べる」の「目指すために必要なこと」について、記述の具体性を検証指標とする。調べた仕事については職種を調べた者、企業を調べた者、いろいろである。たとえば職種の記述には以下のようなものがある。①②③は3人の学生の記述を記載している。

【具体的な記述例】

ホテル業界：人とのコミュニケーションの取り方を学ぶ。接客の仕方を学ぶ。

とれる資格をたくさんとる。

図書館司書：①本に愛着をもっている／集中力・忍耐力／体力／サービス精神、幅広い分野の知識に精通している

②司書資格、コミュニケーション能力

③資格が無いと無理？⇒資格がなくても図書館で働くことは可能だが有資格を応募条件にしている場合が多い⇒資格を取得するためには（3種記載）

経理事務：入職にあたって、特に学歴や資格は必要とされない。関連資格としては、日商簿記検定、簿記能力検定があり、取得していると仕事の役に立つ。金銭を扱うため仕事の正確さ、注意力、几帳面さが求められる。また、決算期等の繁忙期は締め切りに間に合わせるため仕事の速さと粘り強さも必要である。

グランドスタッフ：①英語の勉強、体力づくり、精神力、ビジネスマナーの資格 など

②英語力を身につける。正しい言葉遣いと正しい日本語を話せるようになる。

③（ANA福岡空港）専門学校・短大・大学卒業（見込）以上の学歴、TOEIC500～550以上、英検 2 級以上（英語力が求められる）、中国語や韓国語の語学資格があると採用試験に有利に働く／グランドスタッフに欠かせない資格（略）／

グランドスタッフのスキルに役立つ資格（略）

医療事務：①笑顔、優しい声かけ、責任感 など ②資格は特に必要なし

アパレル関係：コミュニケーション力

具体的記載例に見られるように、「必要なこと」を記載するにとどまっておき、その必要なことを身につけたり能力を向上したりさせるために自身がどのように行動するか、というところまで記述している人はほとんどいなかった。入学前にそこまで考えるという思考にたどり着かないのもやむを得ないかもしれない。しかし、入学後 1 年後には就活が始まるので、入学後のキャリア教育ではもちろん、入学前より就活に向けての意識づけは必要だと思われる。

③意欲と協調性

意欲と協調性については「課題 1 新聞の切り抜き」、「課題 2 気になる仕事を調べる」とも分量で検証することとする。

○課題 1 新聞の切り抜き

A:感想の分量

おおよそであるが、新聞記事 1 つあたりの感想分量は、100 字以内：15 人（20.8%）、100～200 字：34 人（47.2%）、200～300 字：16 人（22.2%）、300～400 字：5 人（6.9%）、400 字以上：2 人（2.8%）であった。

B:取り上げた記事の数

4 つ以内：14 人（19.2%）、5～9：16 人（21.9%）、10～14：12 人（16.4%）、15～19：14 人（19.2%）、20～24：9 人（12.3%）、30～34：3 人（4.1%）、35～39：3 人（4.1%）であった。

○課題2 気になる仕事を調べる 記述の分量

多くの学生がB5版ノートで課題を提出していたことから、ノート（B5版）の分量で換算した。1ページの半分程度か半分未満：16人（21.9%）、1ページの4分の3程度：10人（13.7%）、1ページ程度：47人（64.4%）と、3分の2近くの学生が仕事や企業を調べてノート1ページ分程度は記載していた。

取り組んだ課題量や内容の差はあるが、取り組みの姿勢から、本学のAPを満たした学生が入学していると考ええる。

2. カリキュラム・ポリシーに基づく検証

2.1 試験とその結果としての成績評価・GPA

令和4年度と令和5年度の教養学科卒業生の平均GPA（最高：最低）を表2.1に示す。

なお、卒業延期者は含まない。（令和3年度卒延1名、令和4年度1名）

表2.1 教養学科卒業生の平均GPA（最高：最低）

R4卒業生 平均GPA	1年次－R3－ 2.88 (3.78 : 1.45)	2年次－R4－ 2.78 (3.85 : 1.76)	通算－R3・4－ 2.84 (3.8 : 1.66)
R5卒業生 平均GPA	1年次－R4－ 2.87 (3.96 : 1.29)	2年次－R5－ 3.06 (4.00 : 1.27)	通算－R4・5－ 2.96 (3.98 : 1.56)

令和4年度に入学し令和5年度に卒業した学生の最低GPAは1年次1.29、2年次1.27である。教養学科で新たに設けた成績不振数値に該当する2.0未満6名のうち2名が2年次には2.0以上に上昇した。そのうち、令和4年度報告書で分析した1.5以下であったのは3名であり、うち1名が2.0以上に上昇している。教養学科では学年毎、通年ともGPAが2.8以上となっている。令和4年度と比較し、2年次のGPAが大幅にあがった。これは2年次に3.0以上を取得した学生数が増えた結果である。そのため、学科として適切に学修が進められたと考える。なお、表に加えなかった令和3年度の卒業延期者1名は通年で1.8であった。

2.2 修得単位数

令和4年度と令和5年度の教養学科卒業生の平均取得単位数（最高：最低）を表2.2に示す。なお、卒業延期者は含まない（令和3年度卒延1名、令和4年度卒延1名）。

表2.2 教養学科卒業生の平均取得単位数（最高：最低）

R4卒業生 平均修得単位数	1年次－R3－ 53.4 (71 : 35)	2年次－R4－ 31.8 (53 : 20)	総修得単位 85.2 (124 : 63)
R5卒業生 平均修得単位数	1年次－R4－ 51.7 (65 : 34)	2年次－R5－ 28.9 (52 : 16)	総修得単位 80.6 (113 : 62)

令和4年度に入学し令和5年度に卒業した学生の最低修得単位数は、1年次34単位、2年次16単位、総修得単位数は62単位である。卒業生84名（令和のうち最低修得単位数に近い65単位未満は3名であり、69名は70単位以上を修得している。100単位を超えた学生

は9名いた。なお、表に加えなかった令和4年度の卒業延期者1名は74単位の修得であった。令和4年度と比較し、70単位未満が15名と増加し、全体として総修得単位数の減少がみられた。その他、昨年度同様に資格取得希望の有無で大きく修得単位数に差がでるものの、多くの学生が最低修得単位数を超える単位を修得していることから、学科として適切に学修が進められたと考える。

2.3 カリキュラム・ポリシーに則って学修が進められたかの分析

2.4で詳細に述べるが、教養学科では令和4年度入学生教育課程（令和5年度卒業生対象）において専門科目表の編成を大幅変更した。各科目がカリキュラム・ポリシー（以下、CP）に則って学修が進

められたかが科目担当者によって分析されているが、令和4年度卒業生と令和5年度卒業生の科目配当状況の比較を行うことは難しいため、ここでは令和5年度分について主に卒業必修科目について記載する。

(1) リベラルアーツ

「a 心理」「b 人間と社会」「c 地域と観光」「d 国際理解」の4領域があり、必修科目はc)「かごしまのダイナミズム」「地域とマスメディア」、d)「言語・文化の多様性」の3科目、他の多くは選択必修となっている。前2者については、地元テレビ局を含む外部講師による講義やテレビ局見学等を実施、地元事業所に就職する学生にとって必要な鹿児島に関する学びや、社会の一端を知る有益な学習がなされたと考える。後者については「様々な国の言語や文化について、視野を広く見ることが出来た」「それぞれの国によって文化が違ふことや色々な歴史があることを改めて感じ興味深いと思ったり残酷であると胸が痛くなったりした」という意見から、リベラルアーツ科目の「国際理解の基礎知識と技能を修得する」という点に則って学修が進められたと評価できる。

「心理」や「人間と社会」の領域においても、到達目標の達成度や自由記述から、概ねCPに則って学修が進められたと考える。

(2) ビジネス・コミュニケーション

「ビジネス実務総論」「オフィス実務」が卒業必修科目として、他8科目が選択科目として開講されている。授業評価アンケート結果や、「将来のための知識を身につけることができた」「社会に出て役に立つ知識を学べた」「高校では学べなかったことを学べた」などの自由記述等から、CPに則って学修が進められたと考える。

(3) メディア・クリエイティブ

情報・デジタル系の科目や司書資格に関する科目群である。「情報科学概論」「情報活用」が卒業必修科目として、司書資格関連科目を含め8科目が選択科目として開講されている。選択科目だが選択科目は資格必修科目であり、受講意欲の高い学生が受講していると考えられる。特にこの科目群では実社会で役に立つ次世代の教養ともいえる教育内容になっていることから、CPに則って学修が進められたと考える。

(4) キャリア・アドバンス

「日本語表現法Ⅰ・Ⅱ」「ライフデザイン論Ⅰ・Ⅱ」「キャリアデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ」「プロジェクト演習」が卒業必修科目として開講されている。他、選択科目が2科目ある。日本語表現法では、授業評価アンケート結果や、「将来のための知識を身につけることができた」「社会に出て役に立つ知識を学べた」などの自由記述等から、CPに則って学修が進められたと考える。キャリアデザインやライフデザイン論においては、実務家教員の経験や、外部講師による社会の実情を体現した講義が展開されたことから、専門的な技能の修得や地域社会に貢献できる能力の修得を目指すCPに則って学修が進められたと考える。プロジェクト演習については、「社会で必要とされる専門的な技能を修得できる」という観点から、さまざまなグループワークやプレゼン等により、コミュニケーションスキルや合理的な意思決定プロセスを学んだり、実際に事業所を訪問したりした。授業自体の全体的に高い評価や自由記述の記載内容から、CPに則って学修が進められたと考える。

2.4 科目の配当状況(開講学期)

教養学科の専門科目には、教養学科カリキュラム・ポリシーを踏まえ、教養学科ディプロマ・ポリシーと関連した、以下の科目群がある。この科目群の専門科目に資格に特化した科目を加え教育課程が編成されている。

- ① リベラルアーツ
- ② ビジネス・コミュニケーション
- ③ メディア・クリエイティブ
- ④ キャリア・アドバンス

なお、教養学科では令和 4 年度入学生教育課程（令和 5 年度卒業生対象）において専門科目表の編成を大幅変更した。そのため、令和 4 年度卒業生と令和 5 年度卒業生の科目配当状況の比較を行うことは難しい。したがって、令和 4 年度報告書記載の該当表を表 2.3 に再掲し、新たに令和 5 年度卒業生の科目配当状況表を記す。

表 2.3 科目配当助教表（令和 4 年度卒業生）

科目群	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	総計
① 基礎科目	5	2	1	1	8
② キャリア系科目	2	2	1	1	6
③ 分野別基礎教育科目	2	8	7	8	25
④ 実務教育科目	3 (1)	5 (3)	1 (7)	1 (4)	10 (15)
総科目数	12 (1)	17 (3)	10 (7)	11 (4)	49 (15)

※2 年後期語学選択は 1 科目として算定、() 内は専門科目表外の科目数(外数)

表 2.4 科目配当助教表（令和 5 年度卒業生）

科目群	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	総計
①リベラルアーツ	2	7	7	7	23
②ビジネス・コミュニケーション	3	2	0	1	6
③メディア・クリエイティブ	4	3	2	2	11
④キャリア・アドバンス	2	3	3	2	10
※資格特化科目	1	5	6	5	17
総科目数	12	20	18	17	67

※2 年後期語学選択は 1 科目として算定

教育課程の変更を行ったものの、令和 4 年度と比較し配当学期のバランスに大きな変更は見られない。以上のように全体の科目数および配当学期については 1 年前期に基礎的な科目、1 年後期以降に分野に特化した科目や資格取得に関わる科目を配当するというように、就職活動や卒業後のキャリアに行かせるようバランスよく配当している。

3. ディプロマ・ポリシーに基づく検証

3.1 専門的知識や技能

(1) G P A

令和 4 年度と令和 5 年度の教養学科卒業生の G P A を、数値に分けて整理したものを表 3.1 と表 3.2 に示す。なお、卒業延期者は含まない(令和 3 年度卒延 1 名、令和 4 年度 1 名)。

全体では、G P A が 3.0 以上の学生が 2 年次に大幅に増えた。これは令和 4 年度の 2 年次と比較してほぼ 2 倍の数値である。通算では 49 名 (58.3%) が 3.0 以上、2.5 以上 3.0 未満は 22 名 (26.1%) であり、8 割以上が通算 2.5 以上となっている。以上の結果から、高い専門的知識や技能を身につけた学生を育成できたと判断する。

しかしながら、新たに設けた成績不振に該当する通算 2.0 未満となった学生も令和 4 年度同様に 6 名ほどいる。そのような学生について、在学中に必要な支援を行っていく必要がある。

表 3.1 1 年次 G P A

G P A (1 年次)	3.0 以上		3.0 未満 2.0 以上		2.0 未満	
	R 4	R 5	R 4	R 5	R 4	R 5
人数	41 名	40 名	41 名	38 名	5 名	6 名
割合	47.1%	47.6%	47.1%	45.2%	5.7%	7.1%

表 3.2 2 年次 G P A

G P A (2 年次)	3.0 以上		3.0 未満 2.0 以上		2.0 未満	
	R 4	R 5	R 4	R 5	R 4	R 5
人数	29 名	53 名	51 名	27 名	6 名	4 名
割合	33.3%	63.0%	58.2%	32.1%	6.8%	4.7%

(2) 資格取得状況

令和 4～5 年度の教養学科卒業生の資格の取得状況は表 3.3 のようになっている。

表 3.3 資格取得状況

免許・資格	令和 4 年度			令和 5 年度		
	卒業生数	取得者数	取得割合	卒業生数	取得者数	取得割合
ビジネス実務士	87 名	24 名	27.5%	84 名	20 名	21.4%
上級ビジネス実務士		47 名	54.0%		26 名	31.0%
上級ビジネス実務士 (サービス実務)		50 名	57.4%		38 名	45.2%
秘書士		18 名	20.6%		22 名	26.2%
上級秘書士		46 名	52.8%		22 名	26.2%
上級秘書士(メディカル秘書)		29 名	33.3%		32 名	38.1%
情報処理士		40 名	45.9%		35 名	41.7%
ウェブデザイン実務士		21 名	24.1%		23 名	27.4%
司書資格		13 名	14.9%		18 名	21.4%

多くの学生が卒業最低単位数を超える単位を修得し、資格を取得している。現代社会に求められる知識及び技能を活用する実践力と、情報を収集・分析・発信する情報活用能力について、短大での学びを通して身につけ社会的に認定されたと判断する。

3.2 コミュニケーション能力

(1) 学生の成長に関する所見

本学科では本学科 DP②コミュニケーション能力に強く関連する科目として、卒業必修科目としては、キャリア・アドバンス科目に「日本語表現法 I」「日本語表現法 II」「ライフデザイン論 I」「ライフデザイン論 II」を開講し、選択科目としては、分野別選択必修であるリベラルアーツ科目 (a) 心理) に 6 科目「人間関係とコミュニケーション」「生涯発達心理学」「臨床心理学」「カウンセリング入門」「臨床人間学」「社会心理学」、(b) 人間と社会) に「生涯学習概論」を開講している。特に「日本語表現法 I」、「日本語表現法 II」では、学生によって習熟度の差はあるが、学生からはプレゼンテーションやグループ活動に対する高い評価のコメントが多く寄せられており、「コミュニケーション能力」について育成が図られ、達成できたと考えられる。

リベラルアーツ科目 (a) 心理) では 6 科目中 1 科目以上の選択必修であり、それらの授業アンケートでも学習目的を達成できたような記述も多く見られている。特に「人間関係とコミュニケーション」

は6種の資格の必修科目となっており休学者をのぞいた在学1年生71名中60名が受講し再試験を受験しなかった1名以外は全員単位修得できている。更には「生涯発達心理学」と「カウンセリング入門」の単位修得で受験資格が得られる「ピアヘルパー」認定試験には1年次に11名が受験し10名が合格している。また、令和5年度学生満足度調査では、「本学での学びを通して、自分は成長できたという実感がありますか。」という設問に対し、1年生の83.1%、2年生の91.7%の学生が「実感がある」「やや実感がある」と回答していることから、教養学科DP②コミュニケーション能力（他者に共感し、コミュニケーションスキルを活かして行動する能力を身につけている。）を身につけた学生が育成されたと判断できる。

(2) 就職・進路状況

経団連による「新卒採用に関するアンケート調査結果」によれば、企業が「選考時に重視する要素」に関して、コミュニケーション能力は16年連続で1位であった（2003年度～2018年度）。2022年に帝国データバンクが実施したアンケートにおいても、コミュニケーション能力は1位となっており、選考時において「コミュニケーション能力」は「意欲的」と共に採用時に最も重視される要因となっている。そのような就職環境の中、令和4年度卒業生の就職率は96.1%、5年度卒業生の就職率は94.8%となり、一部の正規雇用を望まない学生以外は社会人として巣立っている。教養学科では、就職活動に備えて、初年度の導入教育として「ビジネス実務総論」さらに社会人としての基礎的なスキル、就活の進め方を「キャリアデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を中心に、グループまたリモート環境も含めたコミュニケーション能力を向上させる教育に力を入れているが、上記のような就職率の高さから、コミュニケーション能力を身につけた学生を育成することができたと判断する。また就職先として、コールセンターや接客などコミュニケーション能力を活かせる職場を選択した学生が多いことも成果の一端の現れであると考ええる。

3.3 グローバル社会への理解

(1) 学生の成長に関する所見

教養学科では令和4年度入学生教育課程（令和5年度卒業生対象）において専門科目表の編成を大幅変更した。国際理解・異文化理解を促進する科目は、令和4年度は2年次の分野別専門科目（国際理解）9科目は、令和5年度にはリベラルアーツ「d 国際理解」4科目、ビジネス・コミュニケーション5科目に再編されている。その中の2年前期必修科目「言語・文化の多様性」では、語学担当教員の知見・体験をもとに外国の文化や社会状況を学習している。学生は同講義を通じて外国語のみならず文化間の比較から異文化理解を深めることができたといえる。

また、「言語・文化の多様性」により生じた異文化への興味に対し、2年次後期開講の選択必修科目「外国語（英語・英会話・ヨーロッパ言語・中国語・韓国語）」において各自の興味に応じた外国語における実社会でのコミュニケーションを想定した講義内容により外国語能力が高められたといえる。

さらに、リベラルアーツ「b 人間と社会」の「哲学」「文化人類学」や、「d 国際理解」の「グローバル・コミュニケーション」「異文化間コミュニケーション論」等においても外国文化のみならず移民問題や国際紛争などの時事問題を含んだ国際情勢を学習することにより、全体として異文化理解力を成長させることができたと考えられる。これらの点から本学科ではグローバル社会が内包する問題への理解を深めた学生を育成することができたと判断する。

(2) 成績評価

必修科目「言語・文化の多様性」の成績分布については、令和4年度は89名の履修者中90点以上8名、80点～89点26名、70点～79点31名、60点～69点24名で全員が合格点に達し、平均点は75.8点であった。令和4年度の反省を踏まえ令和5年度は講義内でレポート作成における注意点などの指導を行った結果、令和5年度は85名の履修者中90点以上24名、80点～89点41名、70点～79点14名、60点～69点6名で全員が合格点に達し、平均点は84.1点と昨年度以上に学習成果が向上する結果となった。

表 3.4 「言語・文化の多様性」の成績分布

	秀	優	良	可	平均点
令和4年度	8人 (9.0%)	26 (29.2%)	31人 (34.8%)	24人 (27.0%)	75.8 (100%)
令和5年度	24人 (28.2%)	41人 (48.2%)	14人 (16.5%)	6人 (7.0%)	84.1 (100%)

〈資料〉

□ 学習成果

本学では、建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、以下に掲げる資質・能力を学習成果として設定している。

- 1 現代生活に即した専門的知識と実践的スキル及び思考力・判断力・表現力と課題解決能力を有する。
- 2 豊かな情操と高い教養を有し、心身ともに健康で調和のとれた人間像を目指して自己啓発ができる。
- 3 地域活性化・国際化の意欲的な担い手としての素地を有する。

上記の学習成果を達成するために、以下のような「教養学科のディプロマ・ポリシー」及び「教養学科のカリキュラム・ポリシー」に従って教育課程を編成し、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与している。

《教養学科のカリキュラム・ポリシー》

- (1) リベラルアーツ科目には、心理、人間と社会、地域と観光及び国際理解の各分野の基礎知識と技能を修得するための科目を配置する。
- (2) キャリア・アドバンス科目には、時代の変化に対応しうる基礎力と現代的な「新しい教養」を修得するための科目に加え、地域に密着したキャリア教育を通して、社会に必要とされる人物像を理解し、自ら考え、地域社会に貢献できる能力を身につけるための科目を配置する。
- (3) その他、実務教育科目には、社会で必要とされる専門的な技能を修得できる科目を配置する。

《教養学科のディプロマ・ポリシー》

(1) 専門的知識や技能

現代社会に求められる知識及び技能を活用する実践力と、情報を収集・分析・発信する情報活用能力を身につけている。

(2) コミュニケーション能力

他者に共感し、コミュニケーションスキルを活かして行動する社会性を身につけている。

- (3) 異文化とグローバル社会への深い理解のうえに、広い視野に立った国際性を身につけている。

5. 短期大学全体

(1) アドミッション・ポリシーに基づく検証

○入学試験

本学のアドミッション・ポリシーは、①高校教育の基礎的知識・技能、②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢、③意欲と協調性、以上3つを備えた入学者の受け入れを方針として掲げている。学科・専攻のアドミッション・ポリシーは、それを踏まえてより具体的に表現したものである。入学試験において、受験者は①～③の要素を総合的に評価され、入学者が判定される。入学試験は多様な選考方法で行われるが、その中でも受験者の多い学校推薦型選抜と総合型選抜について、評価基準とポリシーとの関連性を示せば、次のようになる。(令和5年度は、学校推薦型選抜の小論文と、総合型選抜のアピールシートについて、評価基準の一部(*印の項目)を細分化した。)

		評価基準	①高校教育の基礎的知識・技能	②思考力・判断力・表現力と課題解決に取り組む姿勢	③意欲と協調性
学校推薦型選抜	小論文	出題意図に沿っているか	○		
		意見は明確か		○	○
		論理的一貫性があるか		○	
		分量が上限の8割以上ある*	○		
		誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れが3種類未満である*	○		
		段落の要素があるか*	○		
	面接	入学の目的意識			○
		就学意欲			○
		態度		○	
総合型選抜・一般	アピールシート	志望理由及び自己アピールが十分に示されているか			○
		気になるニュースの要約ができおり、それに対する意見は明確であるか	○	○	
		入学したい意欲が感じられるか			○
		分量が上限の8割以上ある*	○		
		誤字・脱字・表現上の誤り、主述の乱れが3種類未満である*	○		
	面接	入学の目的意識			○
		口頭試問への準備		○	
		態度		○	

*総合型選抜・一般は、「総合型選抜一期、二期、三期、スポーツ・全学科」を指す

その他、一般選抜では学力検査や大学入学共通テスト成績によって①が測られ、調査書によって②③が測られる。社会人入試、外国人入試、帰国子女入試では、小論文、面接、志望理由書によって①～③

が総合的に計測される。

令和 5 年度入試に関しては、各学科・専攻の詳細な入試の分析からわかるように、選考方法それぞれについて適切な方法により、総合的に①～③を満たす入学者が選抜されている。なお、各入試判定にあたっては、受験者を 100 点満点で客観的に評価し、学科の意見を聞いたうえで、アドミッション・ポリシーに基づいて、教授会で全学的に合格者を判定している。

また、アドミッション・ポリシーに対する受験者の理解度については、令和 5 年 4 月に実施した新入生対象の「進学に関するアンケート」において、「本学のアドミッション・ポリシーをよく読み理解して受験しましたか」という設問に対する回答で、回答者の 85 パーセントが「はい」を選択し、各学科・専攻のアドミッション・ポリシーについての同様の質問に対しても、「はい」と回答した者は全体の 90.4 パーセントであった。最も低い学科・専攻でも 83 パーセント（教養学科）であり、アドミッション・ポリシーは受験者に十分浸透していると言える。

○入学前課題

合格者には各学科・専攻から入学前課題が出されるが、それは①～③を備えた入学予定者に対して、短大教育へのスムーズな移行を促し、さらに資質・能力を高めてもらうためのものである。

入学前課題に関して、児童教育学科では、課題内容が知識や技能を測定するのに適しているかどうかについて検討を行い、5 年度に変更した。提出率は上がり、内容の不備もなくなっている。入学前のピアノ実技指導については、初心者講習会が効果を上げており、ピアノ経験者向けの指導方法も検討したものの実現はしていない。生活福祉専攻では、課題の一つとして所定のワークブックを配布し、入学後に試験を実施することで一定の成果を上げている。ワークブックには続編があり、入学後も使用している。食物栄養学専攻では 3 つの課題を出し、面接等で知識・技能の確認をしているが、5 年度はより適切な評価ができるよう、課題の一つを変更した。教養学科では 5 年度、課題を 3 つから 4 つに増やしたため、難易度はやや上がったものの、適切な評価を行うために同じ課題を 6 年度も継続する。

新入生向けの「進学に関するアンケート」には、入学前課題の量と難易度についての設問があるが、生活福祉専攻を除き、量と難易度はほぼ適切であったことがわかる。上述したように、生活福祉専攻では、課題の量が多く、難易度も高いと感じた入学者が多く、4 年度に比べ 5 年度はさらにその割合が増加しているが、入学後も用いるテキスト・シリーズの第 1 冊を課題として配布しており、その効果が確認できるため、変更は予定していない。また、食物栄養学専攻では 5 年度、アンケート結果に基づいて計算問題の解説動画を作成するなど、量と難易度の適切化を図って効果を上げている。

以上の分析・評価から、入学前教育については学科・専攻ごとに課題はあるものの、漸次改善を重ねており、短大全体としてアドミッション・ポリシーに基づく入学者受け入れが行われていると判断できる。

（２）カリキュラム・ポリシーに基づく検証

○試験とその結果としての成績評価・GPA

本学学生の GPA について、令和 3 年度～5 年度入学生全体の、GPA 値の変化について表に示す。この表は、GPA2.0 以上の学生数と割合を示すものである。

GPA 値 2.0～4.0	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期
令和 3 年度生	290/362 (80.1%)	300/353 (85.0%)	311/355 (87.6%)	321/352 (91.2%)
令和 4 年度生	285/350 (81.4%)	287/340 (84.4%)	303/343 (88.4%)	316/339 (93.2%)
令和 5 年度生	252/302 (83.4%)	264/295 (89.5%)	—	—

いずれの年度生も学期を追って GPA 値 2.0 以上の学生数が上昇している。各学科・専攻のカリキュラム・ポリシーに則って、無理なく学習が進められているものと考えられる。なお、令和 6 年度 5 月教授

会の報告事項「GPA に基づく成績不振者の指導について」において、成績不振とされる判断の基準が、児童教育学科、生活科学科では GPA1.8 未満、教養学科では GPA2.0 未満とされた。また、成績不振者の指導は、指導教員により指導と助言（補習・個別面談等）を行うことが確認された。一方、成績の平準化の議論も進んでおり、GPA の基礎となる個別科目の成績評価のあり方についても全学的な理解が深まりつつある。カリキュラム・ポリシーは、適切な評価に基づいて算出される GPA と、それに基づいて行われる適切な助言・指導によって、実質化が進められている。

○修得単位数

各学科・専攻・コースで、卒業までの修得単位数が大きく異なるが、これは卒業要件の 62 単位に、免許・資格等のために必要な単位が上乗せされるからである。後で表に示すように、令和 4 年度入学生の場合、それぞれの卒業時の平均取得単位数は、児童教育学科小・幼・保コース 150.7、幼・保コース 106.0、生活科学科生活福祉専攻 115.6、食物栄養学専攻 77.9、教養学科 80.6 であるが、それぞれのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに則った合理的な取得単位数である。各学期、CAP 制の範囲内で履修登録が行われているが、特筆すべきことは、小・幼・保コースでは修得単位数が多いにもかかわらず、GPA の値が高いことである。

また、各学科・専攻・コースの報告にもあるとおり、教養学科を除き、学期間で修得単位数にある程度の差が認められるが、それにも一定の説明が付けられている。児童教育学科幼・保コースについては、学科による分析でも触れられているように、開講学期間のアンバランスについて検討の余地がある。

○学生アンケート

「学生満足度調査」の中で学生に聞いている項目「教育方針・教育内容について」の結果を下表に示す。令和 5 年度も 4 年度と同様に、9 割以上の学生が「満足」または「やや満足」と回答している。そのため、カリキュラム・ポリシーに則って作られた教育課程は、概ね妥当なものであると考えられる。

教育方針・教育内容について（回答数／比率）

		令和 4 年度	令和 5 年度	対前年度比率
回答数／回収率		592 件／85.1%	557 件／86.8%	+1.7%
回答	満足	221 件／37.3%	256 件／46.0%	+8.7%
	やや満足	333 件／56.3%	279 件／50.1%	▲6.2%
	やや不満	34 件／5.7%	18 件／3.2%	▲2.5%
	不満	4 件／0.7%	4 件／0.7%	0.0%

令和 5 年度から、学生による授業評価アンケートの結果も踏まえて、全教員がティーチング・ポートフォリオを作成し、前期末に中間提出、年度末に後期分を追加のうえ提出することになった。その中に「カリキュラム・ポリシーに則って学修が進められたか」という項目を設け、教員は科目担当者として自己点検し、科目レベルの授業改善にも役立てている。

○教育内容

短大全体のカリキュラム・ポリシーによれば、本学教育課程は「一般教養科目」と「専門科目」科目から成り、「地域等との連携に基づき体験的な学習を行う科目」に注力することになっている。ここでは、各学科・専攻で取り扱っていない一般教養科目についてのみ記述する（専門科目と地域連携科目については各学科・専攻のページを参照）。

一般教養科目は、卒業要件として一般教養科目の最低取得単位数（14、児童教育学科のみ 16）が定められており、大半が 1 年次の開講されて、大学教育への導入にも役立っている。しかし、カリキュラム・ポリシーに示された一般教養科目の分類、①心と思想及び健康の探求を通して自己啓発を目指す科目群、②社会及びキャリアの探求を通して社会参画の力を伸ばす科目群、③異文化および自然界の探求を通して広い視野から思考する力を伸ばす科目群については、分類方法や科目配置の見直しを検討する

必要がある。特に、令和5年度に新設されたデジタル教育プログラムの科目群（「AI 社会論」「データサイエンス概論」「データサイエンス演習」「AI プログラミング」）の位置づけを含めて検討が待たれる。

また、カリキュラムマップにおいて、各科目に紐づけられた主なディプロマ・ポリシー項目に関して、科目数に偏りがみられる。この点も、科目の分類と配置を再検討しなければならない理由である。

（3）ディプロマ・ポリシーに基づく検証

○就職および進学状況

令和3年度以降の卒業生の就職率と進学者数（次年度の5月1日現在）を下表に示す。各年度の各学科とも95%を超える高い就職率を維持していて、全体では98%以上の就職率となっている。進学者のほとんどは、専門性をさらに高めるための編入学である。

就職状況（%）

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
児童教育学科	100.0	100.0	99.4
生活科学科	95.2	98.4	97.7
教養学科	96.2	96.1	97.4
全体	98.5	98.7	98.7

進学者数

	令和3年度	令和4年度	令和5年度
児童教育学科	5	2	1
生活科学科	5	1	2
教養学科	2	4	4
全体	12	7	7

○卒業生アンケート

毎年、卒業生の就職定着率・離職率及びその原因等に関する調査・分析のために実施している「卒業生アンケート」からは、回収率は低いものの、一定の傾向が見て取れる。アンケートは卒業後2年を前にした2月に実施しているので、卒業後2年以内の離職の実態把握の参考になる。

新卒時就職先の離職について（回答数／比率）

	令和4年度	令和5年度	対前年度比率
回答数／回収率	56件／18.1%	61件／21.1%	+3.0%
回答	離職済み	10件／16.4%	+5.7%
	継続就業中	51件／83.6%	▲5.7%

卒業生は、短大で修得した学習成果、取得した免許・資格を生かして就職する者が大半であるが、その後、何らかの理由で2年以内の離職をしている者の割合は1～2割であり、必ずしも多いとは言えない。短大のディプロマ・ポリシーで示された資質・能力をもつ卒業生が、就職先の求める人材とマッチしているということは、一般的に言えるであろう。そのうえで、離職実態の経年変化にも留意し、就職先等の意見も聴取しながら、ディプロマ・ポリシーの実質化を図っていくことが必要である。

大学・短期大学基準協会の「短期大学卒業生調査」については、本学は隔年実施のため、昨年度の報告書から再掲しておく。「大学・短期大学基準協会が実施した「短期大学卒業生調査」（2022年）のデータによれば、アンケート項目「あなたの現在の立場からみて、短期大学で学んだ知識や能力はどの程度役に立っていますか」に対して、本学卒業生が「役立った」「ある程度役立った」と答えた比率が80%を超えた知識・能力は、以下の7つであった：「専門分野や学科の知識」（本学90.9%、全国平均88.6%）、「他の人と協力する力」（92.2%、87.3%）、「コミュニケーション能力」（87.1%、79.7%）、「ね

ばり強さ」(85.7%、77.8%)、「計画性・スケジュール管理能力」(87.0%、75.6%)、「自己の理解」(84.5%、78.2%)、「地域や社会に貢献する意識」(81.9%、73.4%)。残念ながら、本学卒業生の回答率が低く信頼性に欠けるが(令和元年卒、3年卒の78名)、本学の教育の特徴が表れており、全学共通のディプロマ・ポリシーに示された「自己を高めるとともに、他者とのかかわりを良好に保つことができる」や「地域への関心を深め、地域活性化の担い手として課題解決に意欲的に取り組む」との関連性が指摘できる。」

○卒業率

下表からわかるように、令和4年度入学生の卒業率は89.9%と、90%を下回る結果となった。令和2年度入学生から2年連続で下がっており、卒業率は減少傾向にある。除籍者・中退者数(中退率)も、令和4年入学生では29名(8.1%)と例年を大幅に上回り、退学理由も修学意欲低下の割合が高くなっている。この点については各学科・専攻で対策を講じているが(7月教授会資料)、教育の質を維持しながら卒業率の下降を防ぐには、今後ますます、学力不振の学生について、全学的な視野からの修学支援を検討する必要がある。

入学年別の退学者・除籍者数・中退率／卒業者数・卒業率/留年者数												
卒業年度 (入学年)	入学者数 (A)	退学者数 (B)	退学理由				除籍者数 (C)	中退者数 (B)+(C)=(D)	中退率(%) (D)/(A)	卒業者数	卒業率	留年者数
			進路 変更	経済的 理由	体調 不良	修学意欲 低下等						
令和2年度 (元年入)	322	11	7	0	2	2	1	12	3.7%	304	94.4%	6
令和3年度 (2年入)	300	9	4	0	3	2	3	12	4.0%	284	94.7%	4
令和4年度 (3年入)	363	17	5	0	5	7	1	18	4.9%	336	92.6%	9
令和5年度 (4年入)	357	25	11	0	2	12	4	29	8.1%	321	89.9%	7

※ 転学科の場合は、転学科した先の入学者数に計上

○単位修得状況

本学の卒業要件は62単位である。令和4年度入学生と令和3年度入学生について、卒業時の平均修得単位数および最高値・最低値を学科・専攻・コース別に挙げる。

	入学年度	平均修得単位数	(最高値：最低値)
児童教育学科 小・幼・保コース	R4	152.0	(165：94)
	R3	150.7	(167：94)
児童教育学科 幼・保コース	R4	106.0	(116：80)
	R3	105.9	(121：86)
生活科学学科 生活福祉専攻	R4	115.6	(124：111)
	R3	109.5	(120：105)
生活科学学科 食物栄養学専攻	R4	77.9	(107：63)
	R3	81.8	(113：69)
教養学科	R4	80.6	(113：62)
	R3	85.2	(124：63)

学科・専攻・コース間で格差があるが、学生が取得を目標とする免許・資格に応じて差が出ている。また、修得単位数の多さとGPAの値の間に必ずしも負の相関はないことがわかっている。

GPAについて補足する。令和4年度入学生の卒業時のGPAは、93.2%が2.0以上であり、令和3年度生の91.2パーセントを上回っている。内訳は以下のとおりである。

2年後期の GPA 値（上段：令和4年度入学生、下段：令和3年度入学生）

GPA（2年後期）	3.0 以上	3.0 未満 2.0 以上	2.0 未満
対象学生 339 名	149 名（44.0%）	167 名（49.2%）	23 名（6.8%）
対象学生 352 名	146 名（41.5%）	175 名（49.7%）	31 名（8.8%）

この数値からも、本学学生が押しなべてディプロマ・ポリシーに適う人物として卒業していることは明らかである。GPA2.0 未満の学生については、個別的な学修支援や結果的な休学・退学などによって、全体としてその割合は学期を追うごとに減少している。卒業時に GPA2.0 に満たない学生にも、希望した免許・資格を取得して卒業する者は多い。GPA の観点からも、ディプロマ・ポリシーの実質化が図られていると考えられる。

○免許・資格取得状況

各学科・専攻の記述から明らかなように、令和5年3月の卒業生のほとんどが、目標とする免許・資格の取得を果たしている。小・幼・保コースでは小学校教諭二種免許状、幼稚園教諭二種免許状、保育士証、幼・保コースでは幼稚園教諭二種免許状、保育士証、生活福祉専攻では介護福祉士受験資格、食物栄養学専攻では栄養士免許証、いずれも取得率90%を超えている。教養学科においても、多様な免許・資格の中から学生が選択して積極的に取得していることが窺える。これらは各学科・専攻のディプロマ・ポリシーに示された資質・能力や全学的な学修成果が十分身についたことの証明である。

○学生の成長に関する所見

「学生満足度調査」の中で学生に聞いている項目「成長実感について」の結果を下表に示す。令和5年度も4年度と同様に、9割以上の学生が「実感がある」または「やや実感がある」と回答している。そのため、学生生活を通じてディプロマ・ポリシーに示された資質や能力を身につけさせ、自信を持って社会に出ていかなせることができたと考えられる。

成長実感について（回答数／比率）

		令和4年度	令和5年度	対前年度比率
回答数／回収率		592 件／85.1%	557 件／86.8%	+1.7%
回答	実感がある	291 件／49.2%	294 件／52.8%	+3.6%
	やや実感がある	259 件／43.8%	228 件／40.9%	▲2.9%
	あまり実感がない	39 件／6.6%	31 件／5.6%	▲1.0%
	実感がない	3 件／0.5%	4 件／0.7%	+0.2%

○一般教養科目における達成度自己評価

以下では一般教養科目のディプロマ・ポリシーに即して、一般教養科目の範囲で学生の学びを検証する。それぞれの一般教養科目は関連する主な DP（一般教養科目に適用する）に紐づけられており、授業評価アンケート時に、学生から受講した科目の達成度自己評価（5段階）を回答してもらっている。令和5年度開講の一般教養科目について、①「ほとんど達成できなかった」②「あまり達成できなかった」③「最低限達成できた」④「おおむね達成できた」⑤「十分達成できた」のうち、④⑤を選んで回答した件数を、DP別に示すと次のようになる（「FD 報告書 2023」をもとに作成）。

一般教養科目 DP	科目数（講義別）	総回答数	④⑤の回答数	④⑤の割合
①主体的な学びと柔軟な思考	41	408	363	89.0% (R4) 84.4%
②自己を高め、他者と関わる力	53	924	820	88.7% (R4) 83.0%

③地域活性化の担い手としての課題解決能力	6	195	169	86.7% (R4) 77.3%
④社会に参画する力	55	539	451	83.7% (R4) 82.4%

どの科目群でも平均して達成度自己評価は 80%台と高く、令和 4 年度の値を上回っている。したがって、いずれのディプロマ・ポリシーについても、本学のカリキュラム・ポリシーに則った学修が進められたと考えられる。

【補遺】 教育懇談会について

令和 5 年度アセスメント報告書の作成に当たっては、令和 5 年度教育懇談会（7 月 24 日開催、運営会議、9 月定例教授会で情報共有）で 3 ポリシーに関連して外部（高校や事業所）の意見交換の内容も参考にした。そこでは、3 ポリシー自体の妥当性の問題に加え、本学が 3 ポリシーを適切に反映した体制（入試制度、入学者受け入れ体制、教育課程、学修支援体制、就職・進学支援体制等々）を具現化しているかどうか問題となっている。そこで、それぞれのポリシーに関連した論点の整理・検証を行い、アセスメント報告書に補遺として記録しておきたい。

懇談会では、まず志學館学園の建学の精神、本学の教育理念等、三つのポリシー、各学科・専攻の人材養成、入学者選抜、教育課程、学生支援、地域貢献活動について、順に説明させていただいた後、出席された高校、事業所の代表からご意見やご質問をいただいた。ここではその主な内容をポリシー別に論点を整理し、本学の対応を検証する。

（1）アドミッション・ポリシーに関する検証

高校側から地域貢献活動（ボランティア活動）の評価を入試に加えてほしいという意見をいただいた。全学的なアドミッション・ポリシーの中に、「学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人」を求めているとあり、今後検討を要する。

その他、学生募集で企業と連携して地域貢献人材の拡充を図ってほしいという意見が複数出され、中には奨学金返済の一部を企業や事業所が負担するといった考え方も示された。本学ではすでに実施しているものもあるが、検討すべき意見である。

（2）カリキュラム・ポリシーに関する検証

現在の教育課程について、今後に向けていくつかの質問があった。コロナ後の新たな取り組みがあるか、地域貢献に資するボランティアに関して、学科横断的なカリキュラムは組めないか、GIGA スクール構想下で学んできた生徒への対応をどうするのか。これらの問題意識を共有しながら、学生が無理なくより深い学びを得られるように、実現可能なものから取り組んでいきたい。

高大連携という視点からは、地域貢献活動のカリキュラム化は、教員と学生の負担増という点で高校と同じ悩みを抱えており、相互協力によって将来的に解決できる部分があるかもしれない。高校側からは、ICT 人材の養成について教養学科との連携ができないかとの具体的な意見もいただいた。高大連携の在り方を考えていきたい。

その他、就職後に役立つので、講義の中で、議論し考える機会を増やしてほしいという意見や、インターンシップの取り組み推進、社会貢献活動における事業所との連携を希望する意見等、より実践的なカリキュラム編成を求める声が多かった。

（3）ディプロマ・ポリシーに関する検証

懇談会では高校側から、小学校教員養成の在り方について質問があった。すなわち、児童教育学科または小・幼・保コース全体に占める教員採用試験受験者および採用者の割合が低い点について、教員養成の方針が問われていたと解釈できる。これに対しては、コース別のディプロマ・ポリシーはないもの

の、コース選択については入学希望者に十分な説明を行っており、小・幼・保コース希望者には、小学校教諭二種免許状取得については理解したうえで、就職については小学校教諭、児童養護施設、(幼小連携に詳しい)幼稚園教諭、(幼保連携に詳しい)保育士の育成を基本方針としていると説明した。実態としても、そのような方針に基づいて入学者の入学が許可され、教育が行われている。

教養学科について、高校側から、学科イメージが伝わりにくいとの指摘があった。いくつかの「自分の未来を見つける」という学科の性格から、特定の専門性に縛られないカリキュラムとなっており、3つのフィールドを示してイメージ化しているものの、高校生にとってより魅力的な学科イメージが求められている。このような意見を受けて、2024年度から、ディプロマ・ポリシーの第3項目が、「グローバル社会への理解」から「地域・グローバル社会への理解」に変更され、地域社会に貢献する人材の養成が明確にされた。

その他、就職関連では、保育士(保育教諭)の求人倍率、実習先(施設)に就職する割合や学生の就職活動状況、栄養士資格取得者の異業種への就職実態、栄養士資格取得の困難、一般企業就職についての学生の迷い等について質問・意見をいただいた。また、進学について、大学編入の促進等についても質問があった。ディプロマ・ポリシーに示された諸能力を用いて、卒業生が就職・進学の希望を叶えているかどうか、注意深く見守っていきたい。また、コミュニケーション能力や主体性といった、就職先が求める基礎力についても、全学科共通のディプロマ・ポリシーに基づいて涵養する必要がある。

6. あとがき

本学最初のアセスメント報告書は、令和3・4年度の実績に基づいて、令和5年度8月に「令和4年度アセスメント報告書」として作成された。本報告書は第2号であり、令和3～5年度の実績に基づいて、「令和5年度アセスメント報告書」として作成されている。経年変化を含めて記述したことで、今の立ち位置を確認することができた。昨年の「あとがき」に「急速に進む教育改革の流れの中で、未来に向けて時代に即応しつつ本学の教育改善を積極的に推進する必要がある。そのためには、本報告書を出発点として、IR室と連携しながら堅固なPDCAサイクルを確立し、その運用を常態化させることが重要になるであろう」と書いた。しかし、この1年でPDCAサイクルがうまく回るようになったかといえ、なお道半ばである。着実なデータの集積と、それに基づく点検と改善をスムーズに実行できるサイクルをさらに鍛えていく必要がある。未来を創造するために、過去を検証する努力を怠らないようにしたい。

<資料>

学習成果

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、以下に掲げる資質・能力を学習成果とし、これらを学生が主体的に修得することにより、教育目標の実現を目指します。

- 1 現代生活に即した専門的知識と実践的技能及び思考力・判断力・表現力と課題解決能力を有する。
- 2 豊かな情操と高い教養を有し、心身ともに健康で調和のとれた人間像を目指して自己啓発ができる。
- 3 地域活性化・国際化の意欲的な担い手としての素地を有する。

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本学では、上記の学習成果を達成するために編成された教育課程において、所定の単位を修得した人に、卒業を認定し、短期大学士の学位を授与します。以下に、全学科共通のディプロマ・ポリシー及び各学科・専攻のディプロマ・ポリシーを示します。

《全学科共通のディプロマ・ポリシー》（一般教養科目に適用）

- (1) 主体的に学び、多様な考え方に触れ、柔軟な思考ができる。
- (2) 自己を高めるとともに、他者との関わりを良好に保つことができる。
- (3) 地域への関心を深め、地域活性化の担い手として課題解決に意欲的に取り組む。
- (4) 社会や文化に対して関心を持ち、広い視野に立って、社会に参画する力を持つ。

《児童教育学科のディプロマ・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（教育学）にふさわしいものとし、

(1) 教育・保育に必要な専門性

教育・保育に必要な専門的な指導力を習得するとともに、それらを活用・実践する力を有する。

(2) 課題解決能力

教育・保育の課題解決に必要な思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力・人間関係調整能力等を有し、現場で実践できる。

(3) 豊かな人間性

教育的な情熱や使命感・倫理観をもち、社会の変化に対応しながら、理想の教育・保育を目指して

探究し向上しようとする態度を有している。

《生活科学科生活福祉専攻のディプロマ・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉士として深い人間理解ができ、実践的能力を身につけた介護リーダー及び心身の状況に応じた最も適切な介護等を行うことができる人材の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（生活福祉）にふさわしいものとします。

（1）専門的知識・技能

介護福祉及び医療・福祉事務に関する実践的かつ体系的な専門的知識と技能を修得している。

（2）主体的・創造的な課題解決能力

修得した専門的知識と技能を活かして、地域社会の実態を踏まえ、主体的・創造的に貢献する能力と意識をもっている。

（3）人間関係形成力とコミュニケーション能力

倫理観と責任感をもち、コミュニケーション能力と協働性を有し、多様な問題に臨む社会人としての態度を身につけている。

《生活科学科食物栄養学専攻のディプロマ・ポリシー》

食物栄養学専攻は、給食実務に強く、的確な栄養指導と食教育ができる栄養士及び健康の基盤である食物と栄養についての専門知識と技術を身につけ、地域社会の人々の健康づくりに貢献できる人材の養成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（食物栄養学）にふさわしいものとします。

（1）食物・栄養に必要な専門性

健康の基盤となる食物と栄養に関する専門的な知識と技能を修得し、時代と社会の要請に応える力を有する。

（2）課題解決能力

修得した食に関する知識と技能を活かし、地域や現代社会の食に関わる身近な課題を見出し、それを解決に導くために求められる能力を有する。

（3）豊かな人間性

食に関する幅広い知識・興味・関心に基づき、人が健全な食生活を送るために、他者と目的を共有し、協働できるように自らを高めることができる。

《教養学科のディプロマ・ポリシー》

教養学科は、実務教育と教養教育を柱とした実践的教育により、ビジネス実務能力と情報処理能力を身につけ、社会で活かせるコミュニケーション能力を備えた、グローバル社会に幅広く対応できる人材の育成を目的とし、全学科共通のディプロマ・ポリシーに示された諸能力並びに以下に掲げる知識・技能・資質を短期大学士の学位（教養）にふさわしいものとします。

（1）専門的知識や技能

現代社会に求められる知識及び技能を活用する実践力と、情報を収集・分析・発信する情報活用能力を身につけている。

(2) コミュニケーション能力

他者に共感し、コミュニケーションスキルを活かして行動する社会性を身につけている。

(3) グローバル社会への理解

異文化とグローバル社会への深い理解のうえに、広い視野に立った国際性を身につけている。

教育課程編成の方針（カリキュラム・ポリシー）

本学の学習成果を達成するために、ディプロマ・ポリシーに基づいて、「一般教養科目」及び「専門科目」を組み合わせ、各学科・専攻の教育課程を組織的、体系的に編成します。

1「教養教育」は、心と思想及び健康の探究を通して自己啓発をめざす科目群、社会及びキャリアの探究を通して社会参画の力を伸ばす科目群、異文化及び自然界の探究を通して広い視野から思考する力を伸ばす科目群の各分野で編成する。

2「専門教育」は、各学科・専攻の特性を踏まえ、専門的知識と実践的スキルを体系的に修得するとともに、課題解決能力を養うための科目をもって編成する。

3 地域活性化・国際化の担い手としての素地を形成するため、地域等との連携に基づき体験的な学習を行う科目を組み込んだ教育課程を編成する。

《児童教育学科のカリキュラム・ポリシー》

児童教育学科は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、学科の専門教育を以下のように編成します。

(1) 教職課程コアカリキュラム及び保育士養成課程を踏まえ、教師・保育者として必要な資質・能力を育成できるように体系的かつ系統的に科目を配置する。

(2) 学校現場・保育現場等のニーズに応えるため、知識・技能等を高める選択科目を設け、学生が主体的に専門性を高める環境を整える。

(3) 地域のニーズを踏まえ、地域に貢献する教師・保育者としての意識や知識・技能等を高めるための科目を配置する。

《生活科学科生活福祉専攻のカリキュラム・ポリシー》

生活福祉専攻は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、専攻の専門教育を以下のように編成します。

(1) 専門科目には、介護福祉士養成課程を踏まえ、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」及び「医療的ケア」の領域に関する科目を順次性と系統性を考慮しながら配置する。

(2) 選択科目には、福祉に関連したレクリエーションや医療・福祉事務等に関する知識と技能を修得するための科目を配置する。

(3) 地域のニーズを踏まえ、地域に貢献する介護・福祉職に従事する者としての意識や知識・技能を高めるための科目を配置する。

《生活科学科食物栄養学専攻のカリキュラム・ポリシー》

食物栄養学専攻は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、専攻の専門教育を以下のように編成します。

(1) 栄養士養成課程を踏まえ、健康の基盤となる食物と栄養に関する専門知識と技能を身につけるために、体系的かつ系統的に科目を配置する。

(2) 人々の健全な食生活の実践に貢献できる人材の育成のために、給食管理や栄養指導等に関する知識や技能等を高める選択科目を設け、学生が主体的に専門性を高める環境を整える。

(3) 地域社会のニーズを踏まえ、地域の食文化や食教育に対する興味や関心を高めるための科目等も多彩に取り入れる。

《教養学科のカリキュラム・ポリシー》

教養学科は、本学のカリキュラム・ポリシーに基づき、学科の専門教育を以下のように編成します。

(1) リベラル・アーツ科目には、心理、人間と社会、地域と観光及び国際理解の各分野の基礎知識と技能を修得するための科目を配置する。

(2) キャリア・アドバンス科目には、時代の変化に対応しうる基礎力と現代的な「新しい教養」を修得するための科目に加え、地域に密着したキャリア教育を通して、社会に必要とされる人物像を理解し、自ら考え、地域社会に貢献できる能力を身につけるための科目を配置する。

(3) その他、実務教育科目には、社会で必要とされる専門的な技能を修得できる科目を配置する。

入学受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

鹿児島女子短期大学は、建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」、教育理念「創造力・実践力に富み、家庭に社会に個人のもつ可能性を具現できる高い教養と人間性豊かな女性の育成」及び「国際的視野に立って社会の充実発展に寄与する人材の育成」に基づき、学習成果及びディプロマ・ポリシーに掲げた資質・能力を修得した人間を育成するために、以下のような入学者を求めています。

1 高等学校等の教育における基礎的な知識・技能を有し、各学科・専攻の求める専門性を身につけようとする人

2 本学の教養教育・専門教育に十分対応できる思考力・判断力・表現力を有し、課題解決に取り組む基礎的な資質をもつ人

3 学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人

《児童教育学科のアドミッション・ポリシー》

児童教育学科は、子どもの成長にとって重要な乳幼児期及び学齢児童期における教育と福祉に関わる専門的な知識・技能と豊かな情操及び高い倫理観をもち、実践的能力を身につけた幼稚園教諭・小学校教諭・保育士の養成を目的としています。

本学科は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

(1) 高等学校等の教育における基礎的な知識・技能を有し、子どもの成長・発達に関わる専門性を身につけようとする人

(2) 本学の教養教育・専門教育に十分対応できる思考力・判断力・表現力を有し、教育・保育の課題解決に取り組む基礎的な資質をもつ人

- (3) 学校内外での諸活動において意欲や協調性をもって物事に取り組んできた人

《生活科学科生活福祉専攻のアドミッション・ポリシー》

生活福祉専攻は、介護福祉や医療・福祉事務の知識と実践的な福祉的援助の基礎を学ぶことを通じて、生物的・社会的存在としての人間を理解し、将来、福祉、保健医療等の現場で使命感をもって働くことができる人材の育成を目指しています。

本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、介護福祉に対する探究心を有し、現実の社会問題に関心を向けつつ、介護福祉士や介護事務・医療事務に関する資格取得を目指す人を求めます。

- (1) 高等学校程度の教育課程を幅広く修得することを通じて、文章読解力や文章表現力、政治・経済・社会の仕組み等に関する基本的な知識及びコミュニケーション能力を身につけている人
- (2) 多様な人々への支援を通じて、社会に役立つ仕事をしたい人
- (3) 人々の喜びや悲しみを自分のこととして共感し、他者と協働することができる人
- (4) 幅広い教養を身につけて、深い人間理解ができる人

《生活科学科食物栄養学専攻のアドミッション・ポリシー》

食物栄養学専攻は、給食実務に強く、的確な栄養指導と食教育ができる栄養士及び健康の基盤である食物と栄養についての専門知識と技術を身につけ、地域社会の人々の健康づくりに貢献できる人材の養成を目的としています。

本専攻は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、志願者に次のような能力等を身につけている人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育における基礎的学力を備え、健康の基盤である食物と栄養についての専門性を身につけようとする人
- (2) 食や健康に対する知的好奇心が旺盛で、自ら考えて食に関わる課題の解決に取り組むことができる人
- (3) 人と人とのつながりを大切にし、食を通して自分の可能性に挑戦できる人

《教養学科のアドミッション・ポリシー》

教養学科では、教養教育と実務教育を柱とした実践的教育により、人生を豊かにする幅広い教養とコミュニケーション能力の育成を重視し、それに加えて職業人に必要な専門的スキル教育も行うことで、将来社会で広く活躍し、地域に貢献することができる人材の育成を目指しています。

本学科は、鹿児島女子短期大学のアドミッション・ポリシーに基づき、何事にも挑戦しながら多様な社会体験をすることに関心があり、基礎的な知識・技能と社会人基礎力を身につけ、地域社会に貢献しようとする意欲がある人を求めます。

- (1) 高等学校等の教育課程を幅広く修得し、その学習を通じて、読解力・文章力・コミュニケーション能力を身につけている人
- (2) 学校内外での諸活動を通じて、自ら考え判断し、主体的な行動ができる能力を身につけている人